

えにし  
縁  
の  
環 わ

青い眼に映った日本の若者の姿、  
近隣の人々と神々の姿、  
その確かな記録を残した

フリッツ・カルシュ博士

若松秀俊



旧制松江高等学校正門(登録文化財)

えにし  
縁  
の  
環 わ

フツツ・カリン博士

八十余年前の友と学び舎  
共に語らた懐かしの日々

若松 秀俊

カルシユが確かめた  
人のきぎずな

カルシュ博士が昭和十四年三月まで教鞭を執った旧制松江高校は彼の愛する生徒を育み、自らの存在意義を確認できる重要な場でもあった。カルシュの家族が大正十四年十月から暮らした「官舎」は平成十九年に、旧制松江高校の正門とともに登録文化財に指定された。



旧制松江高等学校正門

## 青眼に映った

### 日本の若者の姿

#### 近隣の人々

#### その確かな記録を残した

フリッツ・カルシュ



まえがき

天から与えられたカルシュ博士との縁に導かれながら彼の足跡を辿って、すでに多くの歳月が流れた。だれに尋ねても彼についてはその名前すら知ることもなかったし、誰も関心をもつこともなかった。一部に、説明や紹介の機会を用意してくれたこともあったが、彼自身の果たした偉業のほとんどが無視されてきた。それが、今では関係者の間では、少なからず関連の講演を行う機会を得るまでに状況が変化してきた。これまでの海外を含む全国各地での長い調査の間には、数々の偶然の出会いがあり、そのすべてが人と人とのつながりの不思議な縁に結ばれていた。

その端緒になったのは、もちろん著者のカルシュ博士の次女との偶然の出会いであり、それに連なる教子との出会いがあったからであった。旧制松江高校の卒業生で金沢在住の澤田の所持していた写真や同級生で福岡在住の増田が面会時に語ってくれた当時の想い出であった。それと前後して、田島、竹原より提供された、かつてカルシュ博士が描いた自らの心底を窺える数枚のパステル画の写真であった。そしてさらに、カルシュと直接の師弟関係にあった溝上、白石、宮田、遠藤、江上、奥野、中村らからの貴重な資料と写真の提供であった。

彼らのうち白石、宮田、岡崎、それに奥野らとはその後何度か面会して、具体的な調査を行った。そして、遠藤の場合は京都の自宅を訪ね、彼のアルバムから古い景色や松江の写真や、カルシュの家族と交換した手紙の写しを手に入れることができた。その折に、カルシュ在住当時の松江の様子を調べようとして、大学を含めた関係官庁にも当時の松江高校に関連した風景や人物の写真が残っているかどうかを直接尋ねてみたことを記憶しているが、

島根大学の三原人事掛長による人事記録の発見以外には、残念ながら他の成果を手にする事ができな

った。

しかし、カルシュの次女でドイツ・マールブルク在住のフリーデルンとアメリカ・テネシー州に住む長女メヒテルトの自宅を訪ねるに及んで、娘たちの厚意から多くの写真を入手することができた。このことが調査の大きな弾みとなった。そのほとんどに撮影日、場所などが、独特のドイツ髭文字で添えられていた。画質の劣化は驚くほど少なく、保存状態は良好だった。公開に関する厳重な約束のもとに、その大部分のコピーを日本に持ち帰った。それらは、カルシュの言動や彼の家族、また生徒達との対話を併せて、松江の昔の姿を再現する手掛かりとなった。これと並行して、その間、今となっては極めて貴重になった、調査に協力してくれた故人の証言や、調査をめぐる肉声を残すことができた。

カルシュが残した日本の昔を写した写真は、旧制高等学校の学び舎と教育の現場だけでなく学生や教職員  
の姿、街中の人々との交流はもちろんのこと、中国地方から九州、そして瀬戸内地方、さらに関東とくに箱  
根、軽井沢周辺の広範にわたる日本の原風景や改築されたり、今では焼失して存在しない神社仏閣など貴重  
なものが含まれている。

ここではカルシュの人としての姿が浮かび上がるように、カルシュ自身の撮影になる写真だけでなく、関  
係者の撮影した写真を合わせて、また旧生徒の記録や家族の証言をもとに再現してみた。写真には戦時中の  
海外の写真も含まれており、当時の史実をこの時期に垣間見ることができたのは著者にとって望外の幸運で  
あった。

《文中敬称略》

## 内容

まえがき	8
カルシュの生涯	13
日本への道	16
日本とのかかわり	19
カルシュの教育	22
学問の因縁	23
旧制松江高等学校	26
松江高の生徒らと	29
嵩のふもとに	31
記念祭	36
カメラ友達	40
講義録から	43
音楽の授業	47
受験期の様子	50
写真から窺う授業	54
シュタイナーの教え	57
一時帰国	60

生徒の思い	63
広島と長崎	66
ニーチエの解説書	71
ドイツ学生との交流	73
遠足	76
寮生活	80
同僚とともに	84
研鑽の跡	87
アクセンフェルト教授	90
歴史の中で	92
カルシュの暮らし	96
官舎の暮らし	97
クリスマス	100
日本の母	104
斜向かい	107
奥谷の雪景色	110
官舎の庭	113
近隣との付き合い	116
親しい友と	117
子供の世界	121

軽井沢での避暑	127
大使館時代	130
住居と別荘	131
心の在りか	135
再会	146
失われた気概	151
カルシュの残したもの	154
雑感	160
あとがき	163
記録と報道	166

## カルシユの生涯

フリッツ・カルシユは一八九三年（明治二十六年）、ドイツ東部のブラゼヴィッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に生まれ、一九七一年（昭和四十六年）にカッセルで没した。一九二五年（大正十四年）九月末に、憧れの日本に來た彼はプラーゲの後任として松江高校に赴任、松江市奥谷町の官舎に住んだ。そして一九三九年（昭和十四年）三月にシュヴァルベと交代するまで教壇に立ち、この地で妻、エンメラとの間に、長女、メヒテルト（昭和三年生）、次女、フリーデルン（昭和十二年生）に恵まれた。

彼は絵画が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。さらに軽井沢近辺のバステルや水彩の風景画が、合せて九十枚以上、現在も二人の娘の手許に分割して保存されている。また、関東以西の当時の景勝地や神社仏閣とそこでの人々の暮らしの様子を撮影した二、〇〇枚を超える貴重な写真も残している。

彼は同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、また外交官として終戦まで働いた。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの影響による。彼の薫陶を受けた生徒の中には《長崎の鐘》で知られる永井隆博士をはじめ、多くの著名人を見出すことができる。たとえば、政界では国務大臣など要職にあった人々、学界では文学、医学、化学などの分野で著明な学者、法曹界の重鎮、大使などの外交官などが見られる。さらに数知れない実業界の指導者、スポーツ界の功労者が挙げられる。また、当時指導を受けた台湾と朝鮮からの生徒は、殆ど例外無く、戦後に故国で要職

に就いてその発展に貢献した。その他、個人的接触や間接的接触によって、影響を受けた人は各界に多数見られる。

カルシユは一九一一年（明治四十四年）、ドレスデンにおける国際博覧会で《日本》と出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次世界大戦に志願兵として従軍し悲惨な戦禍を目の当たりにした、彼は復員後に専門を電気工学から哲学に変えた。マールブルク大学で著名なニコライ・ハルトマン門下として哲学を学び、大学在学中の一九二二年には、宗教学を専門とするエンメラ・アクセンフェルトと結婚した。一九二三年（大正十二年）に哲学博士の学位を取得、以後人智学の研究組織に加わった。友人で後に東大教授を務めた長屋喜一の進言もあって、旧制松江高等学校（現・島根大学）のドイツ教師の道を選んだ。彼は生徒にヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの精神を磨き上げた。当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ、自分のもてる知識を惜しみなく生徒に伝えた。彼の著述には、『カントとハルトマンの比較論述』（日独文化協会、昭和三年）があり、その他ドイツに関する著述（同協会、昭和九年）がある。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は、彼の紹介と協力によるものであった。また、長屋喜一と『ハルトマン哲学』の共著を残している。一九三七年（昭和十二年）、復活祭の期間に英語講師のウッドマンの住む隣家が火の不始末から火災に遭遇したが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます日本を好きにしたようである。

同博士に関しては、門下の酒井勝郎が『田舎の大学』（私家版、昭和四十五年）で記述し、また同窓会誌『翠松』や旧制松江高校史の『嵩のふもとに』で、その人柄を当時の生徒が語っている。松江高校を一九三九年（昭和十四年）に離任した彼は駐日ドイツ大使オットの仲介で、一九

四〇年（昭和十五年）から一九四五年（昭和二十年）までの間、国会議事堂近くの大使館に勤務することになり、そこで終戦を迎えた。

カルシユは日本の宗教や文化の多様性に対する共感や人間肯定のために想像力の世界を自らの精神に描くことの重要性を語り、人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。内容は、哲学史と有史以来の人の意識の進化に関すること、また学問や内的修練により、シュタイナーの思考に如何にして到達可能か、についてであった。彼はこれを広めようとしたが、戦時中のドイツではこの関連学会は禁じられた。また、宗教哲学への興味から、高野山で修業を体験し、著名な哲学者の西田幾多郎や宗教家の鈴木大拙らとの親交も結んだ。

両親から影響を受けた長女は、戦後自らその研究を行い、次女はマールブルク大学で政治学と地理学の学位を取得し、自由ヴァルドルフ学校の教員になった。この学校は、日本では《シユタイナー学校》と呼ばれ、その全人教育には興味深いものがある。

一九四七年（昭和二十二年）に帰国した彼はマールブルクで成人教育に従事し、そこで在独日本公館や日本の著名人との親交をもった。一九六一年（昭和三十六年）には年金生活に入り、キリスト教共同体の古巣のカッセルに移住して研究を続けた。

一九六八年（昭和四十三年）には、かつての生徒から招待を受け、日本各地を訪問し、彼らと親しく過ごす時間を得た。この時、彼は出雲大社で、日本における自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。約一ヶ月間の滞在の後に帰国した彼は一九七〇年（昭和四十五年）に金婚式を祝い、翌年、脳腫瘍のために亡くなった。

## 日本への道

カルシユが最初に日本と出会ったのは、一九一一年（明治四十四年）のドレスデンの国際衛生博覧会でハーンの肖像と書籍を手にしたときであった。マールブルク大学在学中に日本の旧制高等学校の講師への誘いがあったが、一九二三年（大正十二年）の関東大震災のために募集が見送られた。その後、終生の友であった長屋喜一の進言もあって、松江高校のドイツ語教師の道を選んだ。一月半に及ぶ航海の末に神戸港に着いたカルシユ夫妻は東洋の見知らぬ国で、不安と期待のまじり合った気持ちで一杯であった。

それでも何とか一九二五年（大正十四年）九月二十八日に憧れの松江の駅に着いた。駅では高畑教授と多田教授が迎えてくれた。駅前には現在のタクシートの客待ちと同様に

人力車が待っていた。一行は二台の人力車に分乗して奥谷町に向かった。やがて二年前に建てられ、行儀良く二つ並んだ洋館に着いた。隣のパウマンに挨拶を済ませて、そのまま、プラーゲの住んでいた、向かって右側の建物に入居して、この地での生活をはじめること



松江高等学校教室にて



1923年 哲学博士学位記

とになった。これが、日本での暮らしの発端であり、諸々の人々との出会いが彼を待っていた。奥谷の官舎の近くは不思議なくらい気持ちが悪く、霧囲気で満ちていた。ここから万寿寺や千寿院に近い。後に長女メヒテルトの遊び場になったところである。神々の住む出雲地方のことはハーンの書からよく知っていたつもりであったが、実際には、全くのところ自分たちにとって未知の世界であった。

カルシユは、この地での暮らしの中で自然の中の神々と人々の間には絶対的な上下関係ではない、日常的で相対的な信頼関係と調和が保たれていることに気づいた。そして、その心のあり方に限りなく愛着と親近感を覚えるようになった。彼は積極的に人々と交流し、最初はためらいのあった周囲の人々に暖かい心の輪を広げていった。それは、ヨーロッパにはない、自然との語らいの雰囲気と落ち着きとの不思議な秩序を醸し出すものであった。やがてこの地を抛り所とする彼の生活は心と体に大きなやすらぎを感じる日々に変化していった。同時に、自然とともにある人々のもつ神々への心の在り方を知るようになった。

カルシユにとって松江の街・松江高校・奥谷官舎は、彼が日本を知る生活の基盤であり、生徒との交流の場であった。

青い眼に映った大正末期から昭和初期の光景に、また同僚や友や近所の人々と語らった日々のなかに、カルシユは心暖まる数々のものを見出しながら、多くの若者を心より育んだ。そしてその確かな記録を残した。その証が学校にも野外にも官舎にも、写真や証言としていまも見ることができる。



1926年 官舎の門を背にして、終生の友の長屋喜一、妻エンメラとともに

カルシユ博士が教鞭を執った旧制松江高校は、官舎での生活とともに、生徒の教育だけではなく自らの存在意義を時間をかけて確認できる重要な実践活動の場でもあった。

当時、松江のシンボルの一つの大橋は木製であり、ハーンの手にもあるような、高下駄のなる情緒豊かな音を奏でる姿であった。

### 『あゝ傘たして われ行けば ほかに 頼のめたく』

そう、六期理乙生の眼科医の澤田弘夫がアルバムの文面を口ずさんでくれた。そこからも覗える、そんな風情を醸し出す雨の日の旧大橋の情景であろうか。その写真が残っている。



1928年 旧大橋 旧制松江高等学校6期生アルバムより

ところで、松江高等学校では一九二二年（大正十年）入学が最初の一期生で、最後の生徒が一九四八年（昭和二十三年）入学の二十八期生である。文は文科系、理は理科系の専攻、甲は外国語として、英語、乙はドイツ語を選んだことを示す。六期理乙生は一九二六年（大正十五年）入学の理科類でドイツ語選択の生徒を意味する。

## 日本とのかかわり

哲学者であるカルシュ博士は一九二五年（大正十四年）から一九三九年（昭和十四年）まで旧制松江高校のドイツ語、ドイツ文学、ドイツ哲学の教師であった。一九四〇年（昭和十五年）からは東京のドイツ大使館で外交官として勤務し、横浜に居を構えた。終生の師として尊敬していたルドルフ・シュタイナー



カルシュ自筆絵画 御津浦と加賀浦間の大碕の入江

を日本に紹介し、人々から愛されながら教育分野に大きな功績を残した。実際、元長崎大学教授の永井隆、元大阪大学教授の奥野良臣など、各界広範囲にわたり多くの優れた人々が彼の門下に名を連ねている。彼の在日中の貢献と功績について知る人々は、戦中・戦後の混乱期にあつて、彼の足跡を殆ど記録にとどめ置くことができなかったようである。しかし、諸々の調査や照会を経て当時の日本を心より愛し、周囲の人々を包みこみ、天性の教育者として生徒たちに知識を授けていたカルシュの心が明確になった。それゆえ、彼が知日派として日独両国の友好のために労を惜しまず尽くしてきたことが両国の人々に広く知られることを願っている。



1927年 中海北岸の様子

彼の大きな功績は、教育実績だけでなく、ライフワークの哲学に関する

膨大な未刊行の原稿と九十枚を超えるパステル画・水彩画および二千枚を超える大正末期から昭和初期の日本各地と海外の写真を残したにも見られる。

調査の開始時に、すでに数少なくなつた彼の生徒を通じて直接カルシュの人柄を知つた。その中で著者を支えたのは、カルシュ個人の笑顔に凝縮される旧制高校時代の彼らの思い、涙で語る青春時代の恩師のカルシュとの交流、印象深い言葉とその意味、そしてまた著者が追う調査の中で自らに浸透してきたゆぎない彼の人間性の共感であった。

それゆえあらゆる機会を捉えて、彼の功績を声高に訴え、記念館の創設についても真剣に各方面に呼びかけていた。そうしたさなか、取り壊しの意見が大多数のなかではあつたが、朝日新聞の協力もあつて、状況の変化がみられ、やがて運動が盛り上がり、カルシュが家族とともに十四年間暮らした奥谷の官舎は二〇〇七年（平成十九年）に、旧制松江高校の正門とともに登録文化財に指定された。彼が住んでいた官舎の再建のために必要な官舎の全体像の写真とその詳細にわたる環境をメヒテルトから直接入手し、調査の大きな目的を達成することができた。

この過程の中で、彼の日本の自然や神々に寄せる関心が推測できるに至つただけでなく、カルシュが残した写真や自筆の絵画や家具調度に表れている日本での生活や肉声の記録は、家族や旧生徒達との言動と相俟つて当時の生徒や近隣との交流の姿の再現の手掛かりとすることができた。

カルシュの撮影した写真には美しい風景と自らの心の反映であろうか、神社仏閣が目立つ。そして、海と湖、陸地の織りなす日本独特の造形の美の調和を何度も採り挙げていく。戦中戦後の混乱のために彼の足跡の記録が乏しくとも、奉職期間からいって、有形無形の功績が少なくないことと確信し、彼の足跡と言動を確認するなかで、それらの記録の必要性を感じ、極力写真による裏付けを元に本書を執筆するに至つた。

カルシユの教育

終生の友との出会い  
旧制高校に見た  
官舎の庭に見た  
美と女らぎ



フリッツ・カルシユ

## 学問の因縁

第一次大戦後、マールブルク大学でエンメラ・アクセンフェルトと知り合ってまもなく結婚したフリッツ・カルシュには、婚約時代に交わしたシュタイナーの八つの人生訓がある。自らのデザインのイラストと文面が書き入れられたノートが長女メヒテルトの手元に残っている。

カルシュは一九二三年（大正十二年）に哲学博士の学位を取得したが、師のニコライ・ハルトマンが著作をまとめる時期に重なって、就職先の世話もあまり得られず、適当な職場を見出すことができなかった。メヒテルトの談話である。そのために妻エンメラとの暮らしはかなり困窮していたという。

ところで一九一九年（大正八年）にドイツ・シュトゥットガルト市で自らの理論を元にした教育を開始したルドルフ・シュタイナー（一八六一—一九二五）にカルシュは在学中にスイス・バーゼルのゲーテアヌムで出会った。それ以来、彼はシュタイナー哲学（人智学アントロポゾフィー）に傾倒して、継続的にゲーテアヌムを訪れていた。学生の頃からドイツ語の個人教授を通じて、また専門的な議論を通じて親しくなっていた日本からの留学生の長屋喜一の紹介もあって、募集のあった松江高等学校のドイツ語講師の



フリッツがエンメラに贈ったシュタイナーの8つの人生訓

職を選択した。和歌山高等商業学校も有力な就職先の候補であったが、ドレスデンの博覧会を通じて日本の魅力を知っていただけでなく、ラフカディオ・ハーンの手紙を通じて憧れを抱いていたフリッツは妻エンメラとともに松江に赴任することになった。

赴任先の松江高校では、当時哲学者として国内で大きく才能が注目されて、海外留学を果たして帰国していた同僚の高橋敬視教授と親しく交わり、シュタイナーおよびハルトマンの思想に関する議論が随時行われたことが伝えられている。すなわち、カルシュは来日した一九二五年（大正十四年）から程なく、シュタイナーを日本へ紹介したことがわかる。

日本では、一般に子安美知子早大名誉教授がドイツ留学中に、娘の通った小学校を通じて知ったシュタイナー教育を著書『ミュンヘンの小学生』で一九七一年（昭和四十六年）に紹介したと言われている。

シュタイナー教育の大きな特徴は芸術性と社会性、自己修練と相互作用であることは周知のとおりである。

カルシュの影響の拡がりとしては、自らの生徒によって多くのことが語り継がれたことからもわかるように、戦後活躍した多くの著名人を育んだことがあげられる。また、娘達に託したシュタイナー哲学の実践を通して教育界の偉人であることがわかる。さらに、長女メヒ



マールブルクの自由ヴァルドルフ学校からの著者宛ての招待状

テルトは関連文献の独語―英語翻訳と出版に今日に至るまで従事し、アメリカではシュタイナーと人智学研究の中心人物となっている。次女フリーデルンはマールブルクのシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）で教育を受け、マールブルク大学で学位取得（政治学博士と地理学博士）後に、母校の自由ヴァルドルフ学校で教育に従事した。なお、フリーデルンから二代にわたって教育を受けた日本人もいることがわかっている。定年後の現在も彼女は継続的に活躍している。

こんなこともあって、著者が調査を始めて、しばらくした二〇〇一年にフリーデルンを通じてマールブルクの自由ヴァルドルフ学校からの招待を受け、同学校を訪問することになった。滞在中、カルシュユかりの地を訪れ、フリーデルンと一緒に、エンメラとゴットフリートと共に葬られているカルシュユの小さく質素な墓を訪ねてきた。

## 旧制松江高等学校

先頃文化財に指定された旧制松江高校の校門と今は存在しない校舎の玄関の佇まいが美しい。そして雪を抱く校門の姿と遠景が何ともいえない情緒と奥ゆかしさを醸し出す。それとともに、東側に広々とした田圃を望む校舎とのなす調和の姿が美しい。そんな風景を切り取った写真がカルシュユの手によってたくさん残されている。

これらはカルシュユが松江と学校の生活にどうやら慣れた一九二七年（昭和二年）の十二月のメモが添えられていたものである。

松江高校ではカルシュユはドイツ語の会話はもちろん、ドイツ文学を担当科目としていたが、時には生徒の要求に応じて



1932年当時 松江高等学校正門・玄関  
9期生卒業記念アルバムより



嵩山と枕木山を背景にした雪の中の高校入口

講義だけでなく、ドイツ人の生活ぶりを得意の挿し絵を織りまぜて詳しく披露した。この様子が九期文乙生の宮田正信の当時のノートに残されているだけでなく、直接自らその状況を語ってくれたことがあった。

加えて、高校生にしてはやや大きな社会的テーマを与えて独訳させ、それをみんなで味わいながら、ドイツ語の共通の学習としたことがあったという。その話をきいて、著者が小学生の頃の授業の様子を思い出した。教師が児童の要求に応じた、日本昔話やアラビアンナイトの物語をしてくれた後に、その印象を個々の児童が想像で絵に描き表現したことである。できがよいのをみんなを選んで、整合性を考えながら部分と部分を分担描写して、全体を完成した。そんな思い出が今に残っている。絵と文章の表現、また知的レベルの違いがあるもののそれと相通じることがカルシウムも行い、感性を通して異文化の認識の重要性を教え、集

団を通して己の教育法をも



1927年 旧制松江高校の東を望む

団を通して己の教育法をも  
検証しようとした様子が知  
れる。生徒に対する博士の  
行動の原理が生徒の純真さ、  
感性、さらに知的レベルに  
よく合致したからであろう  
が。教室の中では、いつも  
それらに手応えとその喜び  
を感じる日々であった。彼



校舎の窓から松江高校六期生



高等学校の北側を望む



松江高等学校校舎

の思いと心情の波がすべて生徒の胸に届き、知識と共に反響する日々であったからである。かくして、生徒はシュタイナー哲学を源流とする自分の教育理論を実践する恰好の対象でもあった。しかし、本国政府のシュタイナー教育の禁止によって、日本においても残念ながら中座せざるを得なかった。

そう言いながらも娘のメヒテ

ルトの教育に関しては、散歩に連れ出しては、ゆったりとその人智学概念を繰り返して伝えることができた。妹のフリーデレンについては、メヒテルトがその役に当たることができた。

母エンメラは娘にドイツ人として必要な知識や行動を日常の生活の対話の中で教えた。そんな日々の連続であったことをメヒテルトは著者に語ってくれた。とはいえ、当時、なぜ自分が近所の仲良しと同様に学校に行けないのかは、どうにも合点がいかかったとのことであった。

戦後、日本では、シュタイナーの思想に賛同するグループにより、これに基づく教育が復活し、今に至っている。

## 松江高の生徒らと

自分の学問的立場をふまえて、一貫して日本の文化や宗教を研究していたフリッツ・カルシュは、出雲の地での暮らしを通して西洋と東洋の文化の洞察的な比較をも行っていた。その証しが、勤務していた松江高校の生徒との対話や講義録の中に覗える。カルシュに関する逸話や旧生徒の手記については枚挙に暇がないし、そうした記録の中にカルシュの人物像が繰り返し語られている。これらより当時の生徒から、いかに彼が個人的に慕われていたかを知ることができる。

拙著『湖畔の夕映え』でも、何度か述べたことであるが、それには否定し難い教育上の大きな意味があると思っている。同じように教師の身である著者の立場からみても、重要な教育に対する問いかけをしてくれるものがある。ときにはカルシュは官舎の自宅を開放して生徒との交流に努めた。例えば、一九二七年（昭和二年）三月の添え書きのある中村俊雄（四期理乙生）、片山光治（五期文乙生）、三宅寿（五期理乙生）の生徒を自宅に招いて歓談した際の写真も見つかっている。

カルシュと生徒とのエピソードには、野外の授業での生徒とのやりとり、一時帰国時の歓送会、雨の日の生徒との心の交流、下宿での生徒とのやりとり、哲学書の話などが残っている。いずれも、カルシュの人柄を如実に物語るものである。



松江高校の玄関前で生徒とともに

に物語るものである。

なかでもカルシュの人柄を端的に知る上で、重要なエピソードである「軽石」の話が詳しく伝わっている。ここには《長崎の鐘》でよく知られている永井隆が同級生の酒井勝郎を通してカルシュとともに描かれている。これが初めて日本経済新聞の文化面に紹介されてからは、カルシュを話題にするときはいつでも、これが最初に表れる。生徒達の問いかけに、いつも真面目に対応する彼の誠実さを如述に示すものであるからである。教室では、自分の信条に反する思想についても生徒の要請があれば、それを解りやすく、かいつまんで教えてくれたというそんな逸話を、アリストテレスを信奉していた九期文乙生の岡崎道夫が真顔で語ってくれた。そして、また文学への興味と自由の理念の影響を受けた俳諧研究者で岡崎の親友の宮田正信もカルシュがどれほど生徒たちに慕われていたかをにこやかに語ってくれた。同じことは、十期文乙生の矢崎憲正の手記から、また十四期理乙生の奥野良臣が自宅に訪問した際に、自分の人生の範としたカルシュの口癖の「ありがたいさん」を、わざわざ口まねで示してくれたことからよくわかる。



自宅玄関前で生徒とともに記念写真

松江高校（現・島根大）と大阪高校（現・大阪大）の野球の試合の様子をフリッツ・カルシュが撮影した写真が残っている。野球は当時アメリカと日本で行われていたに過ぎなかった。それゆえ、ヨーロッパでは、ほとんど知られていなかった、いわば異質のスポーツであった。しかし、当時の高校生には極めて興味深いスポーツであって、選手の姿を映した写真が見つかっている。本調査に協力してくれた十四期理甲生の田島康弘は主将で体格に優れた四番打者であった。奥野とは無二の親友で終生の友であった。ところで、記録によれば一九二八年（昭和三年）六月に地下水をくみ上げた冷水によるプール開きが行われたという。それまでは、嫁が島周辺や農業用の貯水池で練習したという



1926年8月  
松江高校と大阪高校との間の野球大会



野球部の二人



1930年7月全国高等学校陸上競技会  
前列右から2番目が白石磷

ことである。なお、やや時代がくだっても、当時の水泳クラブの写真は男子の水着姿がまるで現在の女子スタイルであった。これらは十三期理乙生の遠藤捨雄の撮影によるものである。

ところで、クラブ活動に専念して、当時の高体連でも優秀な成績を残した陸上クラブのつわもの白石磷（きよし）の自慢話がある。それを物語る写真を、健在の頃に著者に解説入りで提供してくれた。これはカルシュの撮影ではないが、一九三〇年（昭和五年）七月の全国高等学校陸上競技会で団体優勝した時の記念写真である。



水泳部の仲間とともに 遠藤捨雄による撮影



1927年12月4日 弁論大会の一コマ

真ん中で優勝旗をもつのは白石が尊敬していた八期理乙生の田村忠雄主将である。文字通り全力疾走し、京大時代にもそれを貫いた白石の生き方は強烈に著者の胸を打つものであった。白石は、今で言えば学級委員長である「高等小使」を名乗り、胸を張って苦労話を語ってくれた。そのまとめ役としての権威と実力は仲間内で終生続いた見事なものであった。その証拠が、彼が司会を務めた座談会の記録として残っており、著者もこれについて『四ツ手網の記憶』で述べたことがある。

それにしても旧制松江高校の同窓会が発行した校史の『嵩(だけ)のふもとに』には、生徒たちのクラブ活動の様子が少なからず語られており、その活動のエネルギーに驚かされる。当時、野球部、庭球部、蹴球部、籠球部、柔道部、剣道部、弓道部、陸上競技部、水泳部、端艇部、スキー・山岳部、自動車部、厚生部、馬術部があり、その歴史と記録がある。戦後に衆議院議長として活躍した棒高跳び選手で七期文甲生の福永健司の活躍が知られている。学校創立以来、北三寮と南三寮の自習寮が順次増設されてきた。そして、南北寮対抗の運動競技会や試合が盛んに行われた。また、寮生の思想や活動を反映した雑誌の発行も行われた。当初新入生は強制入寮であったがすぐに志望者のみとなった。とにかく、街中でも寮でも下宿でも、世の中を格調高く語り合った者が意気軒昂な生徒たちであった。学園生活



木製仮橋にたたずむ高校生



昭和12年頃の高校生の出で立ち  
14期生卒業アルバムより



教職員とともに寄せ書き

について全部がカルシユの撮影ではないが、記念祭と呼んだ学園祭や弁論大会、スポーツ大会など、生徒の課外活動の様子を撮影した数多くの写真が残っている。このような場で活き活きとした生徒の様子をカルシユは目の当たりにした。それは本当に、楽しく心温まる、しかも感動的なひとときであったに違いない。このころは先生に対する思いや結び付きだけでなく、生徒同士の絆もとても大事にしていた。これを語る当時の寄せ書きが残っている。こうした体験が今に至るまで、彼等の親密な交際の基礎となっている。



桜の季節 松江高校

これとは別に、一九二九年(昭和四年)、秋の恒例行事の外国語弁論大会が開かれた時のことである。これには、九期文乙生の高田富之が出場した。当時一年生だった彼が、「階級闘争の弊害」という新聞の社説を自らドイツ語に翻訳して、それをもとに堂々と演説したことが記録に残っている。彼は後に学生運動のために退学処分にあつて、正確にいえば、卒業できたわけではないが、同級生は卒業生と認め、大事な仲間としていつも声をかけていたという。彼は後に、東北帝大に入学を認められ、正式に卒業している。埼玉に住んでいる子息と電話で話した折、戦中は革新派として活動した父富之の記念館を管理しているとのことである。高田は戦後に衆議院議員となり、福永健司や運輸相など要職にあつた九期文甲生の細田吉蔵らと共に国政に携わりながら、同時に自らの主義主張にとらわれず親交を長く保つたということである。

当時、高田が辞書と首引きで書き上げた演説の草稿は、小林松次郎主任教授によって真っ赤に直された。高田はその原稿のすべてを暗記していたと、同級生の白石磷(きよし)が著

者に語ってくれた。とにかく、ドイツ語をやっとこなしていたと自認していた白石にとっては高田の演説もさることながら、演説の後でカルシユが高田に称賛の言葉をかけて、握手を求めていたことが驚異であったとのことである。

## 記念祭

創立が一九二二年(大正十年)の松江高等学校は、毎年現在の学園祭と呼ばれる催し物を行った。松江高校だけでなく他校でも見られる年に一度のこうした記念祭には、勉強よりもこちらに全力を傾倒する生徒も多いくらいで、この行事にはことのほか張り切るものであった。みなその用意で忙しく、分担を決めるのもテーマを決めるのも「高等小使」が音頭を執って行った。白石磷が嬉しそうに語っていた。最初の写真は校門から父兄が



記念祭会場へ急ぐ街の人々



弓道部の披露演技



1934年11月3日の記念祭 演劇の後で

家族を  
伴って  
見物に  
訪れた  
ときの  
様子であらう。  
写真には生徒たちの団結を示す  
作品や印象に残る演劇の記念の様  
子が残っている。したがって、出  
し物は知恵を働かせないと理解で

きない仮装、時代劇や世の中の風刺など若者らしい訳ありの作品があったと伝えられている。これとは別に運動クラブでは弓道、剣道など自慢の出しものも数多く見られた。

記念祭の模擬店の名前に託してカルシュに関して、奥野良臣が手記を寄せてくれた。彼によれば、カルシュの口癖は何かして貰うと《ありがとうさん》であったという。ある年の記念祭の折、奥野らの十四期理乙クラス三十名の出し物の一つとして模擬店が一軒急造された。飲食店を提供したりして《まち》のメツチエンなど人々を歓待するのであるが、生徒は模擬店の名前を《有難うさん》とした。先生の口癖を真似て麗々しく大きな店名として張り出したのである。カルシュの人氣が高かった

一つのエピソードである。



記念祭ポスター

微生物学に大きな業績を残し日本のジェンナーと呼ばれる奥野は古い昔のことではあるが、鮮明に覚えているとのことだ。実際、学術情報にドイツ語の論文が重要な先端的役割を果たしていた時代に、カルシュから教えられたドイツ語が彼のマリアアに関する世界的研究成果に大きな影響を与えたことを自ら著者に感慨深げに語ってくれた。

また、「ドイツ語を教わったことは勿論のことであるが、それ



1935年記念祭 14期理乙生による模擬店

と同時に重要な人生哲学の一端を教えられ、私の後の仕事に重大な影響を与えた自分の大恩人でもある」とも印象深く語っていた。



記念祭の広告

著者との別れ際に、「今天国に居られる先生に、私共の模擬店名《有難うさん》の写真に大きな熨斗(のし)を付けて差し上げたい」そう言いながら、当時の資料や記念祭の写真を手渡してくれた。その写真の様子を見て、今もあまり変わっていないことを感じたものであ



1935年 模擬店の前で(14期理乙生卒業アルバムより)

った。

ところで、この頃は今でいう未成年の飲酒はどうであったか聞くのを忘れたが、キリンビールのテントの模擬店はなかなかモダンであったようだ。すし、ライスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅茶、ミルク、ケーキ、コーヒーなどを一〇〜二〇銭(?)で売っていたようで、

現在の大学祭の模擬店とそっくりだ。とにかく、学校教育全体が、生徒を自然な形で専門の途に誘導していったし、それが画一的な誘導でなく個性に合ったものであったという。

思い切ったエネルギーの燃焼の仕方を、またひとの優しさと思いやりを授けてくれたカルシュを今も折にふれて思い出すという。同様のことを五期理乙生の酒井勝郎も自ら教鞭を執った島根大学で自分の学生たちに語っている。彼の学生であった江角比出郎の言葉であった。

## カメラ友達

カルシュと言えば、大柄のかなり福々しい、中年の外国人を思い浮かべる。庭球部に属し主将を務めた親分肌であった遠藤参次郎が言っていたとのことだ。ドイツ人の先生が嫌いで、わざと怒らしたりして、授業の進行を遅らせたりしていたという。

彼の弟で十三期理乙生の遠藤捨雄が著者に面白がって語ってくれたことがあった。参次郎は一九二一年(大正十年)入学の一期文乙生なので当時のドイツ人教師はプラーゲであった。彼については、五期理乙生の酒井勝郎がその様子を詳しく描写している。とにかく、几帳面過ぎて生徒は大変であったとのことである。遠藤捨雄の場合は、一体どんなドイツ人が現れるのか、大いに興味をもって、初めての授業を待ち受けていた。すると他の先生と同様に、広い袖に朱色の長い紐のついた大きな黒のガウンを纏い、窓の側まで歩いて、「ダス イストアイン フェンスター」と言ったのが、授業の始まりだったことを思い出すという。

カルシュ自身がアグファ製のカメラを携えては、いろいろと写真を撮って、自ら暗室を自宅に備えて現像・拡大・焼付していた。

遠藤捨雄は高校入学祝いに兄の参次郎にカメラを買ってもらった。学校の勉学は、そつちのけでカメラいじりであった。そんなことからカルシュと親しくなった。彼の遺した写真は多岐にわたるが、カルシュとの一緒に旅行の写真があるだけでなく、自宅にも何度か招かれてその時の写真も残している。

ところで遠藤は出身が京都で京都帝大農学部農業化学科を一九三九年(昭和十四年)に卒

業した。彼は戦時中には南京師団の済南自動車部隊所属であった。一九四四年（昭和十九年）になって戦地から呼び寄せられて、陸軍航空燃料工場に配属させられた。ここで、前の世界大戦中にドイツが試みたという木材の糖化を日本でも行うことになった。どの文献を見ても、二つの方法が、数行載っているだけだった。基礎実験が終わって、テストプラントを行うための一トンの鉛が既に底をついていたのを思い出した。カルシュ先生は、野戦では、どんな仕事をしていたのか。仕事の合間に考えたりしたものだった。



写真機を構える遠藤捨雄

そして、第二次世界大戦は終わった。――

戦後、遠藤は日紡に復職し航空燃料製造やビニロン製造に携わった。退職後は二十年間短大教授を務めたという。兵庫県の会社に居たときだが、カルシュ先生が日本に来るとのことで、同窓会から報せてきた。大阪で歓迎会をやると言ってきたけど、その為に会社を休む訳にはいかないし、残念に思ってたところ、都合よく大阪に出張を命じられた。先生の喜ぶ顔を想像しな



グランドでの遠藤捨雄

がら、姫路城の写真を買って鞆に入れて、大阪での仕事をすましてから、ホテルに電話したところ、すでに歓迎会に出ていた。ところがホテルでは、会場の名も、場所も知らないと言った。世話役の家に電話したがわからず、スゴスゴと大阪を去ったことを思い出した。同窓会幹事役に聞いて東京のホテルに送るとか、間に合わなければドイツの家を聞いて送り届けるのが常識だったろうが、その時は思いつかず、ガツカリするだけに終わってしまった。

## 講義録から

二十世紀も押し詰まった二〇〇〇年（平成十二年）の秋深い頃、九期文乙生の宮田正信がノートを土蔵の中から、偶然見つけたとのことを電話で突然、著者に連絡してくれた。必要な部分をコピーし、丁寧に糊付け製本して送ってくれた。早速ノートを開いてみた。ノートに記録したドイツ語のアルファベットは今日の筆記体とは違う。そう



1931年当時の宮田正信のノート

簡単に読めやしない。頁をめくるうちに、ローレライの歌詞が現れた。これなら著者も歌詞を全部そらんじている。これを基に筆記文字の解説を始めた。やがて、カルシュ博士の授業の様子が目に



宮田自筆のローレライの歌

浮かぶようになった。丁寧な講義とそれを細部にわたって、記録した生徒の宮田の生真面目さがよくわかった。それにしても、驚いたことは、これ程几帳面に彼がノートを取っていたことであつた。

宮田は大阪出身の国文学者で、滋賀大学教授などを務めた、俳諧・俳句の研究者で一九七〇年（昭和四十五年）に文学博士を授与されている。著書に『雑俳史の研究』があり、亡くなる前日まで、毎日研究に勤しんでいたという。ところで、ノートの発見と同時に、自由題のレポートの答案用紙が出てきた。カルシュの授業には試験はなく、自由題の宿題があつた。丁寧に細かく添削がしてある。その添削結果が残っている。カルシュは、授業中に自分の専門に関連する分野に話が及ぶととても嬉しそうに、黒板にチョークで図を添えて講義をしてくれたことを宮田が、手紙の中で語ってくれた。

カルシュが九十枚に余るパステル画を残していたことを後で宮田に電話で話したら、なるほど思い当たる図解が多い講義であつたと語っていた。

他のエピソードからも窺い知ることができるが、生徒の質問をうるさがることもせず、決してそれをはぐらかさず、カルシュは徹底してつきあってくれた。生徒に対しては、上段に構えた態度を見せることなく、教師としての思いやりの態度に今も頭が



宮田の宿題の添削結果

下がる思いであるといっていた。

ノートからは細かく講義の内容が窺え、当時の授業を彷彿とさせる。時には、聞き取りの練習の添削もあったようだ。丁寧な一人一人の答案を見ては、出来がよければ「グートまたはデア・グート」と微笑みながら返却してくれたとのことである。先生が答案用紙を一人一人の生徒に返却する。宮田が思い出の中で語ったその風景が眼に浮かぶようである。

当時ドイツ語は先生四人がかりの授業からなっていた。うち三人の先生については定期的に学期試験があったが、カルシユの分は別枠で、特に時間を定めて試験を受けた記憶がない。毎週が実地訓練の連続で、終始ゆったりと先生に向かい合っていたればよかった。それゆえ、このノートは断片的なメモなので、先生が熱心に話してくれた当時の様子を正確に再現することは、至難の業である。しかし、記録された語彙の累積の向うに遠い昔の情景が浮かんで来る。そして、大好きなカルシユ先生の教壇の周囲に、在りし日の話のテーマをおぼろげにさぐり求めることができたという。



手紙の書き方: 宮田のノートより

ノートのありのままを紹介すると、一九三〇年（昭和五年）四月早々の木曜日から開講だったことが判る。最初は、神話やドイツ古代の農耕社会の話、さらに挨拶の仕方と都市生活の話が、そして先生の板書の図解とともに進行した様子が、それを写し採ったメモから窺わ

れる。よく黒板にチョークで図解して、説明してくれたのが今更のごとく思い出されるとい

う。  
このノートへの転写から、ありし日の先生が板書する後姿が偲ばれる。宮田の感慨深いことばであった。これほどカルシユの絵図を使った講義の仕方に関心をもっていた宮田が、松江近郊の風景画をカルシユが密かに残していたことを著者からの話で初めて知って、とても驚いたが、同時に前述のように合点がいったとのことであった。

カルシユは講義のなかで手紙の書き方を教えたそうである。ここには手紙の書き方の図解の板書

を載せた。なるほどヨーロッパ風の封書の書き方である。  
ノートによれば、この手紙の書式の丁寧な解説のあとで、話題が変わっている。とにかく、当時の髭文字の筆記体は読みにくく、解読が用意ではなかった。

## 音楽の授業

ところで、ノートの記録のなかに最初の三曲が毎時間続いた箇所がある。これが一寸異常であることに気がついて、思いを巡らしてみると、これには実は訳があった。そこから第三学年の、卒業までの残り少ない最後の授業が始まっていたからである。

一九三一年（昭和六年）は十一月初めから約一ヶ月間同盟休校という授業放棄の異常事態が起こっていた。ことの顛末と反省、評価はさし措いて、先生も我々生徒も、疲労困憊の態で、父兄や街の方々にもいろいろと心配をかけたことがある。その騒動がとにかく曲りなりにも結末を迎えた十二月の初めのこと、三曲が集中的にノートに残されているのだ。書き留めた時期を背景に、これらの歌曲を眺めていると、今まで気付かずにいたことに、今さらながら心打たれる。ほかでもない、これら三曲の裏からにじみ出て来るカルシュ先生の深く温かい無言の教育愛とも言うべき優しさである。その時は、クラスの誰もが、そんなことに恐らく気付かずに過ぎ去って来たと思う。

ほぼ一ヶ月振りに教室に戻って来た生徒達は、自身ではそれに気づかずとも、先生の目からは、一月前の生徒とはやはりどこかちがって見えたに相違ない。顔つきからだけでも、どことなく以前とは違って荒んで見えたのであろう。それを目ざとく感じ取った先生の温かい思いやりの心から出た、咄嗟の処置であったろうと思われる。この三曲連続の歌の時間を間に置いたおかげで、正月明けからは平常心で大学進学の準備に専念できたのだと思う。

この度手元に眠っていたこのノートをとり出し、これらの記録に再会したのはまさに奇縁

であったと宮田が繰り返し、笑顔で語っていた。どの歌の場合にも一行一節ずつ黒板に向かつてチョークを走らせつつ、あのやわらかい低音のハミングで確かめるように歌詞を書き進む後姿が目に浮かぶという。その後、皆で節廻しを辿りつつ歌い俵い覚えたのだった。

ローレイだけでなく、次に出て来る軍歌、シューベルトの菩提樹、さらにゲーテの野バラもすべて同様に写し取った。とにかく気分転換で肩の凝りをほぐすための授業であった。

ローレイや菩提樹は和訳の歌詞で、すでに耳に馴染みの歌であったが生のドイツ語で歌う感動はまた新鮮であった。とりわけ生徒を喜ばせたのは《兵隊の歌》であった。明治以来の聞き訓れ、歌い馴れた日本の軍歌の概念には当てはまらない歌で、その刺激は強烈であった。

こんな軍歌があったのかと深く心が揺さぶられる思いがした。戦線の悲惨のひとかけらもなく、ただサラッと唱い流した所があるが、それもあとに続く楽隊の囃し詞の繰返しで消し去ってしまいうアツケラカン振りであった。これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍した際に持ち帰った先生の唯一の戦場土産だったのかもしれない。

この歌は卒業後も折にふれては口ずさんで当時を思いやる愛唱歌の一つとなり、今でも時々話題になる懐しい歌であると、宮田・岡崎・白石がともに語ってくれた。因みに、この軍歌は、カルシュが再来日したときに、みんなで声を揃えて歌ったという。来日歓迎会で岡崎が司会で宮田が率先して言った。

「先生に習った、兵隊さんの歌でいこう」

「ヴェン イム フェルデブリッツェン デイグラナーテン、ヴァイネン デイメトヒエン  
ウム イーレ ソルダーテン。(手榴弾が野原で炸裂する。兵隊さんを悼み涙を流す娘たち)  
ヴァルム？ アイダルム アイブロス ヴェーゲン チンデラッサ ブンデラッサ……  
…」

「古い歌だね。私は忘れた」

と一寸先生がとぼけて見せた。忘れるはずがない。幾重にも思い出深い歌なのだ。

その場に居合わせたメヒテルトも童心に返った。

久方振りに先生に会いたいと思っていたかつての同僚や生徒は、滞在先のホテルに泊って、一緒に遅くまでゆっくり話が出来た。そんな話があった。

その歌を、白石と宮田の音頭で著者の前で岡崎とともに歌ってくれた。

## 受験期の様子

受験勉強はこの時代にもあった。生徒たちには、切羽詰まった気分はなく、どの帝国大学にもおおらかな入学者の受け入れ方針があったからである。しかしそれでも、英語、ドイツ語、学校によってはフランス語などの学習は重視された。専門課程で海外の文献を読むためであったと聞く。

一九三二年（昭和七年）正月明けから三月初めにかけては和文独訳の連続であった。これはおそらく教頭でドイツ語主任の高畑教授あたりの要望によるものであったという。近づく帝大受験に備えて、入試問題集をもとにした特訓であった。後述のように、前年の春から半年の予定で一時帰国していたカルシュが帰任した頃から始まっていた。しかし、このときは、十一月の一ヶ月間の空白をうけて、年明けと共に急に厳しくなったもので通常はもつとんびりしていた。ストライキによる授業放棄の後であったからである。

ところで、ドイツ語の問題には一寸首をかしげるような日本語の文章の翻訳が少なくなかった。さぞ日本語の解釈からいってカルシュ先生も色々苦労したことと思う。もちろん他の同僚の支えがあったには違いないが、それにしても大変だったと推測される。授業は先ず問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が生徒と一緒に翻訳するという手順で進化した。しかしこれが実際の大学入試にどれほど役立ったのかは何とも言えない。

白石が提供してくれた授業風景の写真はその一コマで、彼の背後の黒板の右が問題文で、ノートにも記録がある場面である。誰の撮影か不明であるが、ファウストの講義風景である



カルシュによるファウストの講義風景

という。日付は不明であるが、一九三二年（昭和七年）一月末か二月初めであろう。宮田の記憶によれば、問題文の方は学友の中村雄光（義明）筆蹟ということである。授業が始まってからずっと味もソツ気もないただの翻訳の作業が続く中で、つい時のはずみで先生もあらぬ方向へ話が逸れたのだろうと思う。

それよりも、これに先駆けて、第二学年からは日常的に生徒の銘々に、毎週短い自由作文をドイツ語に翻訳する宿題を課していた。それを次週の時間の始めに試験用紙を配布して清書して提出させた。そのあとで前週に提出した分に、先生が丁寧に添削を施したものが、生徒の一人一人に返却された。そして、必要に応じて個人的批評を生徒に与えた。生徒にとっては型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく、しかもドイツ語が実際に身についたか分らない。卒業以来の長い歳月が、たまたまこのノートに挟み込まれて残ったこうした宿題の添削で、その時点に還ることができた。懐かしい先生の手蹟を今に伝えてくれている。

これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べてみて思うに、入試問題集の方は目先の功利一点張りでも味乾燥である。先生もあまり気が進まなかったのではなかったかと思う。そ



大学入試のための和文独訳演習

れはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、生徒たちが銘々勝手な自作の文章を稚拙に自力で訳したものを、先生も楽しんだのではないかと思っ

ている。たまに《グート》などの評価を頂戴すると嬉しかったものだ。



カルシュ自筆表題が刻まれている卒業アルバム 9期文乙生 宮田の提供

これらはすべて、九期文乙生の宮田正信による著者宛の書簡と電話での会話の内容によるものである。宮田は二〇〇三年（平成十五年）の四月に逝去したが、今頃は天国で、眼鏡の縁に手をやりながら、生前から慕っていたカルシュと八十余年前の日々を語り合っている彼の姿が目には浮かぶようである。

繰り返しになるが、カルシュの講義を具体性をもって語ることができるのは、何といっても、宮田の残した講義録による。その中では、ドイツの住居、食物、民謡、人々の風俗など

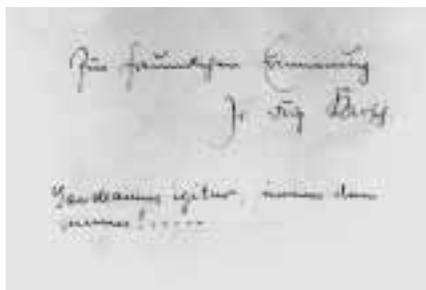


カルシュのマルクスの講義風景

カルシュの生徒との人間的な触れ合いは講義のなかで、如何なく発揮されている。宮田が残した講義録は、単なるドイツ語の講義ではなく、とくに日常の生活を通じたドイツ文化の紹介はまさに彼がヨーロッパに開かれた透明な窓そのものであった。注目すべきは彼の撮影になるものではないが、講義の様子の子の種々の写真が残されていることである。本頁の写真は、拙著『四ツ手網の記憶』でも紹介したが、彼自身の思想とは相容れないマルクスの講義をしているところであり、誰が何の目的で撮影したのかは不明であるが、当時生徒の間で常に話題となっていたマルクスに関する講義の思い出になるものである。彼の信条から言っても、とうてい受け入れることのできない思想を生徒が自ら判断すべきこととして彼らに偏りなく解説した。そのときの講義の様子の写真を白石が眺めながら、岡崎、宮田らとともに懐かし涙をもって著者に語ってくれた。

社会主義の風潮が高校生にも及んでいた一九三一年（昭和六年）、生徒達が理不尽に思えた学校側からの生徒の処分、精一杯抗議した授業放棄のことである。この経緯については宮田が詳しく述べている。その当事者でもあった細田吉蔵元運輸相が生徒の声を語っており、級友もいろいろと記録を残し

## 写真から窺う授業



ドイツの古いラテン語の学生歌(カルシュ自筆)

このように、カルシュの講義録の内容やファウストの講義風景の写真が九期文乙生の手に残っていたこと、また後述のマルクスに関する講義の思い出からいっても、かなり高度な授業が行われていたことがわかる。旧生徒の遺した言葉とともに当時の教育レベルを知る上で大きな意義がある。

実際に、こうしたことが心の糧となり、やがて生徒独自の専門が花開いたのであろう。当時、他の先生の授業の仕方と同様であつたろうが、いずれにせよ単なる紋切り型ではなかった。カルシュの授業が臨機応変に生徒の関心に沿って行われたことがそれを象徴的に表しているようだ。その様子は『嵩のふもと』にも記録されている通りである。

についてイラストを混じえてカルシュが板書した事柄がつぶさに記録されている。その他、このノートの断片的な記録からも窺えるように、平常の講義の話題はまことに多彩であり、例えば南ドイツの方言に見られるようなドイツ語の多様性など、他では聞けない話題も記録されている。そこからは、カルシュの肉声があたかも聞こえてくるようである。

また、これらとは別に、宮田はカルシュ博士がラテン語でわざわざ生徒のために書いたドイツの古い学生歌の色紙を提供してくれた。

ところで、宿題として出した課題に対する自由作文の添削は、日本の若者を知る上で、カルシュにとつてとても役に立ったことである。メヒテルトからの伝聞である。

ている。いつの世でも若者の純真な心と行動は感動を与える。この時のカルシュと生徒達の心の交流は何とも美しく印象深いものを感じられた。

同盟休校が十一月に終わって、翌年早春の卒業前に二階の教室で、カルシュが当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもっていたカルル・マルクスの逸話について、生徒の質問に答えている様子である。この授業は九期文乙クラス一同の心に深く刻まれて残っていると白石が語ってくれた。当時、世の中に流布した思想を授業放棄に関連して、生徒にカルシュが紹介した貴重な教育の場面である。

カルシュはまた、世界的に著名になったシュペンクラーの説も教室で紹介した。ベストセラー『ヨーロッパ文明の没落』の著者と同様に世界の在りようを捉えて、根本精神の欠落している性急な歩みに対する批判を行っている。それだけでなく、人間性を肯定する可能性として『仮象』の世界を描き、さらに『仮象』の社会を実現し、そこで生きることを目指すことの重要性を語っている。

唯物主義に走り過ぎた病態にある文明に支えられているヨーロッパ諸国に文化の崩壊の時代が来る。それも西暦二〇〇〇年頃といっている。この時期に全世界の人々の間に混乱が起り、大きな危機に直面するという。驚くべきことに、これが、当時の講義の中で高校生に語られている。ヨーロッパは物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられていることと、そうした中で、社会も個人も自らを支える精神的根拠が希薄であって、不安定な状況に晒されていることをその理由に挙げている。



カルシュの講義の一コマ

なお、『同質と異質』の『混在と調和』で特徴づけられる日本の文化の一面と、他の地域からの思想や文物を巧みに吸収してこれを融合する力を日本の大きな特徴として指摘している。そして、一つのものが他を滅亡させることなく共存している日本の文化の在りようは世界中の識者の注目するところであると語っていたという。まさに、今日の世の有様を年代を含めて的確に予測していた。このことは混乱の時代に生きる我々にとってシュペンクラーという踏み台があったとしても、実に驚くべき洞察力であり、これらの講義内容を五期理乙の酒井勝郎が記録にとどめている。また、これらに関連することは一九三九年（昭和十四年）に松江高校の退職時に日本を離れるに際して、生徒への別れの挨拶を兼ねた講演の内容でもあった。拙著『四ツ手網の記憶』にもあるように、これを印刷物として残しているのは確かな証拠として極めて興味深い。

## シュタイナーの教え

一九二七年(昭和二年)の復活祭の時期の五期理乙生の講義の中でシュタイナーの教育理念



カルシュによる人智学の授業

ある文豪ゲーテの詩を題材にして、生徒が理解できる仏教に通じる概念を説明した。その解説が米国在住のメヒテルトがドイツ語と英語とで、ゲーテの詩と併せて著者に寄せている。ところで、『シュタイナーの人間観と教育方法・広瀬俊雄著』を

の説明の様子を示した興味深い写真が残っている。カルシュの講義のなかに現れる黒板の説明図とそれらの関連をみて、これがシュタイナーに関する講義であるとメヒテルトが断定している。以下は、メヒテルトの直接の言葉である。シュタイナーの教えでもある輪廻転生をあらわすゲーテの詩をもとに講義した。これを拡大するとその内容が見えてくる。カルシュは思想家で文学者・自然科学者でも

According to what can be deciphered of the writing on the blackboard, it is a matter of a philosophical consideration that my father undertook. To the extent that I can guess at and decipher it, here goes: Uppermost line left: "transcendental subject" - then the circle Line 2 left: "...consciousness as such Line 3 left: "transcendental dualism" Line 4 left: ...ndes In circle in middle "Sub" ("subject"?) can be deciphered. Then, directly below the capital "S": "Categoriess" (by Aristotle?) Next line not readable, then Subject Object. At the blackboard to the right nothing can be deciphered except the obviously clear circle with cross.

メヒテルトによるコメント



松江高校研究室でのカルシュ博士

*Des Menschen Leben gleicht dem Wasser: Von Himmel kommt es,	Man's life resembles water: From heaven it comes,
Zum Himmel steigt es, und wieder nieder zur Erde muss es, ewig wechselnd.	To heaven it rises, and again down to Earth it falls eternally changing.

ゲーテの詩と英訳



ゲーテ「水の精の歌」に関する講義

はじめ諸々の研究者の解釈によれば、人智学は冷静な意識・思考・実践を通して自身の認識力を拡大し、通常感覚では捉えられない世界の認識を目指すものである。しかし、その過程は神からの啓示とか絶対者への帰依によるものではなく、思考と修業の具体的活動からなるものであるというように、古来の日本の宗教的体験に通じるものがある。個々の人間の精神は永遠であり、繰り返し地上の身体の中に再生すると考え、精神は其中で次第に成熟度を深め、やがて自らの姿と世界との関わり合いを認識し、真に自由で自覚的な参加者となるという。この過程の中で適切な指導があつて、子供は健全



1931年春 一時帰国時にあつたのカルシュ先生送別会。  
山下先生とともに撮影。後列左から2番目が岡崎、3番目  
が宮田、前列左から2番目が白石である。

## 一時帰国

先生とのふれあいを最も具体的に表している話に一九三一年（昭和六年）のカルシュの一時帰国がある。このときは、幼少のメヒテルトを祖父母と会わせる目的が大きかったのであろう。というのも前年にアクセンフェルト教授を日本に迎え

たこともあつて、その後を彼を通じてとくにエンメラの肉親へ報告がなされたこと、それに帰国後すぐの七月末に彼自身が六十三歳で亡くなったことからである。

このとき、かの白石磷（きよし）「高等小使」の活躍がものをいった。カルシュは出発前の講義のなかで、途中の滞在地や食べ物を絵に描いて説明した。このことは、外国を知らない生徒たちには目から鱗の落ちる思いであった。彼は松江での秋の学期に間に合うように帰国したが、この留守の間は牧師のハーマツヘルがドイツ語を担当した。その後、しばらくして、授業放棄によるストライキというわけで、前述のカルシュのいわゆる《音楽の授業》が行われたことがある。

に成長し、真の姿の認識に向けて発達を続けてゆくことができるという思想に教育を連ねるものである。

同様な社会的状況が推移する昨今、教育の荒廃は各所で懸念され、戦後変更を余儀なくされた教育内容のこれまでの歩みはともかく、現在におけるその内容の是非の論議が各所で呼び起こされている。もしかしたら、今日問題になっている教育を考える上で、このことは参考になるかも知れない。

写真は、カルシュが一時的にドイツに帰国する時に催された校内の集会所での送別会の様子を語るものである。同時に、カルシュの調査で大きな役割を演じた白石磷のユーモラスな姿を思い起こさせるものでもある。九期文乙生の生徒が催した送別会が済んで、会場である座敷の外の縁側で撮影した写真には前列左より二番目が白石、三番目はクラス担任の心理学が専門で後に東京音楽学校に転任した山下学級主任、四番目はカルシュ、後列左より二番目に岡崎、三番目に宮田、後列右より三人目に鹿野らの顔が見える。

この時の想い出を白石が次のように語っている。第二学年の年度末の早春、カルシュの一時的な帰国時にクラス一同が相談の結果、先生の送別会の開催を決めた。準備はクラスと学校事務局・各教師との連絡役である高等小使の役にあつた朝日重雄と白石磷の二人で担当した。カルシュと膝をつき合わせての会食は初めてのことであつた。会は日本語とドイツ語が入り交じつたとても和やかで賑やかなものであつた。今と違って、料理などお粗末なものでご馳走が何であつたかはすべて忘れた。先生を囲んでの心楽しい集いであつた。カルシュも本当に喜んでいた。このときもいつもの温和な表情で、日本語なしでのカルシュとの会話がつづいた。

最後に白石がドイツ語で閉会の挨拶をして拍手を受けて会は終わった。その時カルシュが白石に微笑みながら握手を求め、短いドイツ語で何か言ってくれた。しかし、この言葉が白石には聞きとることができず、またこれを先生に聞き返す、とっさのドイツ語の作文ができず、今日にいたるまでその意味がわからずにいる。そのことが残念で仕方がない。

閉会の辞が自分に決まつた時に、原稿はすぐ書いたが、ドイツ語に直すときに、「俺が助け

たる」と言った者が鹿野明である。この鹿野が原稿を読みながら、一心にドイツ語の辞書をひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書を引き出して、意見を聞きながら書き上げてくれた苦心の作であつた。この送別会は自分達にとっては学友が残してくれた大切な思い出であつた。



船上の一コマ

カルシュの旅行日程が三月二十日の神戸港出帆であつた。船はハンブルグーアメリカラインのドイツ国籍のヘルクーゼン号で、五月初めジェノヴァ着であつた。陸路ミラノ経由、アルプス越えてドイツ入国であつた。

三月二十日はすでに学年末休暇に入り、学校は入試の最中であつた。大阪の自宅に帰省していた宮田は先生の出帆に間に合うように神戸港停泊中の貨物船宛に、心もとないドイツ語で、旅行中の安全と無事と再来日を願つて書状を発送したとのことである。はたしてカルシュの手元に届いたかどうかは分らぬままであつたとのことである。

それはともかく、ジェノヴァまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労なことであつた。ドイツからは一度、絵葉書の便りがクラス宛に届いた。永らく教室の掲示板上に押ピンで止めてあつたが、いつの間になくなった。

## 生徒の思い

フリッツは、漢字や仮名を毛筆で美しく書いていたという。少しでも日本の心を知るために和服も好んで着たという。妻



1926年6月和服姿の  
フリッツ・カルシュ

のエンメラも和服を  
いつまでも大事にし  
ていたという。今も、  
マールブルクのフリ  
ーデルンの自宅に、  
これらが丁寧に保存  
されている。

次は、父フリッツ  
と生徒の間の心の交



生徒と共に撮影

流をメヒテルトの思い出に基づいて『湖畔の夕映え』で描いたことでもある。生徒から見たカルシュとの親交とその影響の具体的根拠はなんとといっても、調査時に元氣であった人の

《生の言葉》である。また、旧制松江高等学校校史の『嵩のふもとに』の中の【恩師列伝】と【忘れ難き人々】のなかに描かれた〈田舎の大学 酒井勝郎〉、〈カルシュ先生 酒井勝郎〉、〈カルシュ先生、ギルソン先生 田総武光〉、〈六十二年前のカルシュ先生 木村登〉などが根



九州地方でのカルシュの歓待に中心的役割を演じた  
8期理乙生の田村忠雄の訪問記録

拠となる。そこには、ドイツ語を全く知らない生徒に僅かな手がかりをもとに教える才能やショーペンハウエル、マルクスなどの解説授業の様子が見られる。また、〈高橋敬視先生 勝部真長〉には、日本の当時の代表的哲学者の一人である高橋敬視教授に、カルシュがハルトマンを紹介し、その翻訳のために彼自身が協力したとの記述などが見られる。

カルシュの帰国後については、〈カルシュ先生と田島君 奥野良臣〉に、直接の師弟関係にない生徒との交流が書かれ、〈松高を思い出す座談会 岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山〉では、生徒へのカルシュの絶大な影響がにじみ出ている。また、彼の薫陶を受けて成長した〈ワクチン生産の功績者奥野良臣君 青山博〉の記事は、如何に彼の授業が旧生徒を当時のドイツ先進科学やヨーロッパ合理主義へ眼を向けさせたかを雄弁に物語るものである。その他、旧生徒のカルシュの手記については枚挙に暇がない。例えば大阪支部同窓会報『淞友』で〈カルシュ先生を迎えて〉、〈老博士はるるドイツから〉、〈カルシュ先生の授業〉などがある。このように、カルシュのことが繰り返して語られていることは否定しがたい教育的意味があると思っている。同じような教師の身である著者からみても、教育に対する重要な問いかけを投げかけてくれる。

《Brief zu Frau Karsch》はドイツ語で書かれたエンメラ夫人あての旧生徒によるカルシユ逝去時の悔みと慰めの手紙である。また、東京松高会報には《カルシユ先生の訪日について》およびカルシユの招待を計画しながら不慮の事故で自ら完遂できなかった田村のために《追悼田村清三郎君 暉峻凌三》やこれらを載せた新聞記事がある。とにかく、私信を含む数多くの書簡と関連写真があり、旧生徒から個人的に如何に慕われていたかを知ることができ



1933年 復活祭 12期文乙生との宴会

拙著『湖畔の夕映え』『四ツ手網の記憶』では部分的に語ったことであるが、生徒から慕われていた彼には、実にいろいろなエピソードが伝わっている。野外授業での生徒とのやりとり、一時帰国時の歓送会、下宿での生徒とのやりとり、自宅での生徒との交流、哲学書の話などが伝わっている。これらはカルシユの手柄を知る上で、とても重要なエピソードである。そのうちの、幾つかには、たとえば、《軽石》《官舎の火事騒ぎ》《学園祭の模擬店》《マルクスの逸話》《雨の夜のできごと》《ニーチェの解説書》として詳しくとりあげている。また生徒の自宅に招待されたり、逆に少数の生徒を自宅に招待したことは後述のように写真としても、エピソードと併せて残されている。

## 広島と長崎

後に、広島高等裁判所長官を務めた十期文乙生の矢崎憲正自身が実際に目撃した《雨の夜のできごと》については、矢崎本人から聞いたカルシユに関する実話として『四ツ手網の記憶』で述べた。このほかに彼が語ってくれたもう一つのエピソードがある。それは広島と長崎での旅の案内の様子で、当時のメヒテルトの記憶と合わせて紹介する。

カルシユが再来日したときのことである。広島のとろ公園を少し歩いて平和記念資料館に入ろうとした処で、人の影の石を見た。

「原爆炸裂時の人影が壁に残っているのです」と、かつての生徒である矢崎がそう説明した。そして、悲痛な声で

「ほら二人で先生を訪ねた、あの時の、若槻が原爆で亡くなりました」とぼつりと語った。

カルシユが大使館に勤務していたころ、ロンドン勤務とドイツの三年留学から帰った大蔵本省勤務の若槻克彦が矢崎と一緒に訪ねてきた。彼はクラスでも成績首席、行政試験も一番で合格したまれにみる秀才であった。『嵩のふもと』にもそう記録があるし、衆目の一致するところであった。その彼が爆死した。

ドイツの体験をいかにも嬉しそうにカルシユに語ってくれたことを思い出した。

「今ごろ、日本の社会の中枢で活躍しているはずの若槻君が、どうして」



カルシュの広島訪問時に矢崎から受け取ったと思われる原爆ドームを背景とした写真

テルトも驚いている。

縮景園（しゅっけいえん）を訪問する。幾多の景色を繡り込み、縮景したものとも云われる池泉（ちせん）回遊式名勝庭園である。深山幽谷、海浜の景観を同時に展開した景色はフリッツにとっては最も好きな光景のひとつである。池の中央の跨虹橋（こうはし）を渡る。庭園の中央の数寄屋造の清風館、名月亭が印象的である。原爆によって壊滅したが、復興され不滅の美しさを見せている。何と静かな、安らぎの美しさであろうか。かつて和歌の浦で見た不老橋と回遊式大名庭園の養翠園（ようすいえん）を思い出した。

広島城の威容を車窓から右手に見ながら、爆心地に出た。骨格の露わな原爆ドームは写真で何度も見たものである。これを目の当たりにして、戦争の悲惨さを同様に語るベルリンのヴィルヘルム皇帝記念教会を思った。そしてかつて見た東京の瓦礫の山の光景を思った。もちろん原爆の意味とは比較できることではないのだが……。それから元安橋を渡り、《原爆の子の像》の前に出た。その物語を聞いた。原爆で亡くなった少女の像は耐え難い悲しみを誘う。涙をこらえることができなかった。平和記念資料館での解説が悲しかった。展示品はまともに目を向けることができぬような遺品や写真ばかりであった。

その夜、フリッツは、福岡にくる途中に訪れた広島で光景とそこで交わした自分たちの会話を思い出した。どうにも、それらが頭から離れず、なかなか寝つけなかった。

翌日は長崎の訪問であった。《老博士はるばるドイツから教え子三千うれしい招待 全国巡り 長崎に》が地元新聞の歓迎記事のタイトルであった。カルシュ博士は松江を振出しに京都・大阪など関西、そして中国、北九州と回り、十月十四日の夜、長崎市に着いたのだ。そう報道されている。市内に住んでいる十余名の教え子が揃って長崎駅に迎えに出た。

長崎に着いた翌日は朝から街中を見てまわった。二人が街の様子に感想を聞かれて、いたましい傷あとやそのような影をみじんも感じることなく、日本の復興力のすばらしさについて周囲に語った。しかし、それは街の様子に感想に過ぎない。

カルシュは別のことを考えていた。彼の傍らに付いていた、かつての生徒が詳しく説明する。原爆の後遺症で、今でもベッドに横たわったまま毎日を送っているたくさんの人々と心

「はい、先生。その通りです。惜しい人材です」  
「何ということであろうか。そうだったのか」  
フリッツは顔を曇らせた。人の影の映る石を振り返った。  
「長崎にも、同じ様な原爆炸裂時の人影が壁に残っている  
ということですよ」

誰の撮影になるのか広島の写真が一枚残っている。おそらく、訪問中に矢崎から手に入れたのであろう。

終戦直後の混乱期に日本を去ったカルシュ父娘にとって、現在の日本は何処に行っても見違えるばかりだ。みんなきれいに作り直されている。メヒテルトもフリッツもその様子に同じように感心する。世界ではじめて原爆の洗礼を受けたこの地の復興はとて叶わないと想像していたメヒ

の傷と苦悩、肉体の痛みは街の様子とは全く異なることを聞いていた。そして、容易に癒されるものではないことに心の痛みを感じ、カルシュが言葉少なく語った。

やがて、爆心地に近い平和公園を訪れた。力強い巨大な平和記念像が空を指さしている。ふと悲しそうにカルシュが口を開いた。

「永井君は、亡くなったそうですね。医師になると言っていた永井君。白血病だったそうですね」

「カルシュ先生はご存知なのですよ。あの《長崎の鐘》の話を」と傍の者が言った。

ところで、メヒテルトは後になって、英文でこれを読んで感涙に噎んだ。そんなことを電話で話してくれた。

さきほど浦上の天主堂で聞いたあの鐘の美しい音は悲しい響きであった。今日も、あの原爆の日と同じく、晴れた青空が印象的だ。でも、この日はあの日と違って気温も低くやや肌寒い。彼がこの世にいない分だけフリッツにはさびしく、より寒く感じられたのだ。

永井の過ごした如己堂（によこどう）も見てきた。

「原爆をうけた人々のために、医師として最後まで尽くして亡くなったとのことですね」

「放射線医学を専門にしながらも、自分の身を省みることなく……」

同窓生が言葉を継いだ。

「あの永井君。そのむかし、言葉のできない私を散歩に率先して誘ってくれた。生徒との触れ合いの機会を上手につくってくれた……」

「本当に、純真で聡明でやさしかった隆くん。忘れません」

力なく、フリッツが言った。

「会いたかった。元気でいると思っていたのに」

「……どうか、どうか安らかにお休みください」

江戸時代末期に来日し、医学をはじめ多くの学術領域に数々の功績のあったドイツ人博物学者のシーボルトの鳴滝塾のあった屋敷跡を一行が訪れた。古い鎖国の石垣を崩しながら、後の日本を導いたすぐれた弟子をたくさん育てた先人の偉業に思いを馳せた。フリッツは彼の足跡を記した展示に見入っていた。

夕方になると全員が揃って、市内の料亭に繰り出した。郷土料理を楽しみ、話が弾む。尽きることはない思い出話に花が咲いた。

## ニーチェの解説書

この逸話は十三期文乙生の千代（ちしろ）賢治の思い出に基づくものである。高校生は少年から青年になって、誰からも一人前として扱われる。入学式でも校長が、祝辞の中でそう言った。とにかく高校生になった千代は嬉しくてしょうがない。

おれも、おとなだと思えば映画館に入って映画を見るのも、停学覚悟だった今までとは違う。中学生にとって、高校の生活はめくるめく変化であった。それにも増しての変化は経験したことのない外国人の先生から講義を受けることだった。

カルシュ先生は授業中には一切日本語を使わない。我々にはすべてドイツ語で話す建前を自分で守っていた。三年生になって、ある日の終業後に、クラス仲間が高下駄の歯を鳴らしながら下宿へと向かっていた。ふっと後に人の気配がした。気がつくともカルシュから日本語で声をかけられた。

先生が通勤用の自転車を押しながら追いついて来た。ニコニコしながら我々の列に入った。直ぐ近くにいたのが千代だ。しかし、傍らの級友が黙っていると間が保てないので、何か言えよとしきりに促す。しかし、なにを言っているかわからず、往生している。

どうも、何か話さないと間が悪いと思い、「ニーチェの『ツアラトウストラかく語りき』のいい解説書はありませんか？」と思いつきを千代は言った。

学校の授業で習ったばかりのホヤホヤだ。

『ニーチェは十九世紀後半の偉大なる哲学者だ。キリスト教を鋭く攻撃し、超人と永劫回帰

の思想による独自の形而上学を樹立した』というわけだ。

それを聞いて、先生は一瞬、驚いた感じだったが、我が意を得たりという調子で、原書を紹介してくれた。岐れ路まで先生はドイツ語混じりの日本語で情熱的に話してくれた。先生の話の全部は分からなかったが、一所懸命なので友人の心配顔がそこにあった。

「しかし、こりや、エライことになった」と後になって思い出してはそう言っていた。

「ところで、おまえ、カルシュ先生の哲学の立場を聞いたことがあるか？」

と真顔で聞かれて、「うん。ちょっとだけ」と上の空で答えた。

しかし、ニーチェとは難しく出たもんだなどの冷やかしかであった。ともかく、千代には『ただ靴の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩くその印象がカルシュ先生の全存在を示唆している』ように思われた。

## ドイツ学生との交流

ドイツから学生が日本を訪ねてきた。大学生だ。ドイツ学術交流会(DAAD)から派遣された交換学生と聞く。その中の一人が松江に来るから、官舎に来ないかとの誘いがカルシュ先生から講義のあとの教室で遠藤に伝えられた。毎日ドイツ語を学んでいる十三期理乙生の遠藤とはカメラを通じて話し合う親しい仲であった。

いつかどこかで聞いたことであるが、こういうときは、奥さんに花束をもって行くのが念頭にあった。やじ馬根性もあつたが、習ったドイツ語を使うよい機会とばかり、いつもの連中が先生宅に集まった。日本の習慣だ。手みやげに近所で買ったお菓子をカルシュ夫人に手渡す。花束のことは、すっかり忘れていた。

ミュンヘンからきたハンスと初めての挨拶を済ませて会話を交わしながら、まずは、先生の音頭で乾杯だ。ドイツから届いたモーゼルワインを飲み干した。そして、カルシュ夫人の出す料理に手



17期文乙生の中村啓成と共に



1927年3月中村俊雄(4期理科乙類)、片山光治(5期文科乙類)、三宅寿(5期理科乙類)



カルシュの家族と高校生

をつけることになった。シチューのような料理とポテトスープ、それにポテトフリッターだ。これは先生が自ら料理したのだ。次に、テーブルにはザウアークラウト、それに茹でたポテトが添えられた、どこから手に入れたのかアイスバインが出てきた。冷えて脂肪が白く固まって氷のように見える肉料理だ。だからアイスという名がつくという。さらにサラダが運ばれた。とにかく、すごいごちそうだ。料理を口に運び舌鼓だ。ついにハンスの故郷のバイエルン料理の話になった。盛んにヴァイス・ヴルスト(白ソーセージ)の話をする。これを自慢げに遠藤らにわざわざ言う。ちょっと遠藤らを気の毒に思いながら、傍らでカルシュが頷きながら聞いている。とてもおいしいが二十四時間以内に食べないとだめなんだゾ、というありさまである。

続いて、グライダーの話が出てきて、またしても得意になって、自慢気に言いふらす。自分だけが体験したことがあるように、話をつづけた。ドイツ人の講釈癖は有名である。グライダーを見たことがない田舎の松江では、どうにもならないので何にもいえない。発進の時のハンスの手振りを見て悔しかった。このとき、航空雑誌にグライダーで遊んでいる記事や写真が載っているのを遠藤はふと思いついた。日本では自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進するのだ。下手なドイツ語で、それを言うのだが、先方

にはそれが理解できない。ところで、話しているうちに意外と彼の知識が薄っぺらであることに気づいた。どうやら、このドイツの学生は自動車の車軸に差動装置のあることすら知らないらしいぞと今度は反撃に移った。こんなことは雑誌にも出ていた程度の知識なのにと傍の友達も勢いづく始末であった。

この論争？を見かねて、というか、聞きかねてというか、カルシュユが中に入って「遠藤らの言うことも、もつともだ」と言つて、ドイツの学生に説明した。すると、「わかりました。ヘルドクター」で落着である。と同時に小さな声で、「ヘー先生は科学にも詳しいんだ」というささやきがあった。先生が科学的な知識もあり、哲学にも詳しいと聞いていたが、なるほどと思い、皆は改めて、専門外の知識に触れる機会をもてた。

その後、学校では、休み時間に誰かが、「カルシュユ先生と呼ぶよりも、ヘルドクターと呼んだ方が喜ばれるゾ」と言っているのを聞いた。

## 遠足

天気の良い日にはつとめて野外授業を心がけた。時には足を延ばしてハイキングに出かけた。その道すがら実地にドイツ語の会話が楽しめる。さらに時間が取れると楽山にかけた。ここは運動場の代わりにもなった、みんなの好みの場所である。とくにここの睡蓮はカルシュユお気に入り、彼にはモネの世界に踏み込める意義があった。千鳥城の堀に敷き詰められたように見える蓮とは異なることを生徒

たちに見せる蓮とは異なることを生徒たちに説明した。

お気に入りの大根島には何度か数人でハイキングに出かけた。というのもここは牡丹がとても美しくあったからである。

こんなときに、生徒との間の《軽石》で象徴される意思疎通が行われた。そもそも、カルシュユのエピソードが初めて日本経済新聞の文化面に採り上げられてからカルシュユを話題にするときには、いつでもこの話が出てくる。

人の問いかけを決してはぐらかさず、真面目に対応するカル



1927年4月23日 嵩山遠足時の集合写真



大根島遠足時の集合写真 遠藤による撮影



1927年4月23日遠足 嵩山頂上付近で



春日神社へ遠足

シュの誠実さを如実に示すものであるからである。

カルシュが松江に着任してからまだ日の浅い頃、生徒の希望があつて、放課後になつて、野外にみんなで散歩に出た時のことである。先生と五、六人のグループが自転車でサイクリングだ。行つた先で、何かを拾つて来ては、質問して先生に会話のチャンスを求める。それに対して、カルシュはいちいち、面倒がらずに笑顔で生徒の質問に答えながら、出雲浦の千酌（ちくみ）まで来た。

浜で拾つた珍しい小石を見て、チャンスとばかり、ちよつと、先生に聞いてみようかと思つた生徒がいた。今日教わつたドイツ語の練習にもなる。「何の石か？」ドイツ語で聞くと、「ビムスシュタイン」という返事だ。しかし、こんな単語は誰にもわからない。そこで、「ビムスシュタイン？」というはずれな質問をおさるおさる、誰やらが出してきた。先生が言うには「ビムスシュタインは英語ではパミスストーン」。今度は《パミスストーン》の単語がわからず、みんな目を白黒させている。けれども、《パミスストーン？ とは何？》とまではとても聞くわけにいかない。わからなくて英語の単語で説明して貰つて、まだわからないからだ。拾つてきた生

徒はもちろん、みんなもこの石が『何の石』なのか初めから知らないのだ。だから、聞いたのだ。これ以上は続けられない。《でも、会話をつづけたい。何とかしたい》その成り行きを生徒達が不安げに見ている。

すると、先生は紙と鉛筆を出して、筆談で説明しようとした。

まず、エルデ（地球）の内部から、溶けた熱い岩が表に噴き出ると話した。ヴォルカノ（火山）のことだ。「その時ふき出した溶けた岩に水が触れて、（じゅっ）と……急に冷えて、固まる」と説明した。これでみんなが納得した。軽石だということが分かつたのだ。その石、水に浮くかどうか勢い込んで英語で聞いた者がいた。これが、後に《長崎の鐘》で知られる、あの永井隆博士の若き日の姿である。「そのとおり。みんな分かりましたね！」と、先生も嬉しそうに顔をほころばせた。とにかく一件落着きときた。面倒がらず、はぐらかさずに、答えてくれるのを見て、先生の前後を生徒が取り囲み歩くようになった。先生がつまずくと支えるという風にみんなが自然に傍に



嵩山と和久楽山からなる生徒憧れの寝仏

近づいていった。

その帰り道にみんなで食べる駄菓子を買った。ここで、カルシュ先生の口から「いくらするか？」とうっかりドイツ語が出てしまった。続いて、「値段が何ペニツヒなのか」とドイツ通貨の名が出た。すると機転の利いた生徒が「フュンフ 錢！」とドイツ語で値段を言う。先生が五錢玉を盆に置いて、にこやかに店のお婆さんに会釈する。そんな形の集団散歩であった。こんなことが繰り返され、先生と生徒との距離が一層近くなった。

如何に生徒からカルシュが慕われていたかをこのエピソードから知ることができる。

## 寮生活

旧制高校の特色に寮生活があった。当時は原則として全寮制であった。松江ではその寮には自習寮と名がついていた。全国各地から生徒が集まってくるので、寮では多くの人間との出会いがあり、そこで得られる人間形成が評価されていた。

今日の大学の寮は単なる下宿であったり、学生の政治的活動の本拠地だったりする。しかし、旧制高校の寮は、それ自体、教育の場で、それだけ寮生活に意味があった。それは周囲と自身の価値を納得するための、既存の価値の見直しの場であったと思われる。戦後二十年頃までは、戦前の古い体質を残した学寮が存在した。そうした寮の中で著者も生活したことがある。入寮の日に即日退寮しようと思ったほどの不潔さと見かけ上の怠惰、理不尽な先輩との付き合い。どれをとっても、とても肯定できるものではなかった。しかし、やがて、その大きな意味と



松江高校自習寮の前で



万年床の寮の生活



寮生活の様子

一方、寮にも入れず、過ごした高田の思い出は下宿ばかりであったという。石橋通り寺院の裏の小屋に住んでいた。左翼に走り出した頃は当時非法の共産党との連絡に使われていた懐かしい住まいであった。連絡とオルグ担当者が横の墓地をぬけて『第二無産者新聞』等の秘密出版物をもって周囲を気にしながら訪ねて来た頃を思い出して、感無量の思い出である



当時活見と呼ばれた映画鑑賞

に繋がりがあられるのはもちろんで、寮で培われた人間関係は一生にわたって続くものであるといえる。自らが経験した学生時代の寮生活を振り返ってそう断言したい。それまで信じて疑わなかった価値の自らの破壊と見直しは、今日にあっては情報が入手しやすくなっているのが容易であるように見える半面、実は強烈な人との切磋琢磨に欠けているので十分にそれを納得できない難しさがある。また、強烈な出会いの機会も減っている。

人生の揺籃期、胎動の時期に出会った事象や人々は一生にわたる財産なのであるが、この意味でもとくに旧制高校および学寮というものは、今日の状況を見れば、もっと評価されて然るべきである。

その生活の価値がわかる。一晩かけて共に大声で議論し、ある日はストームで大暴れをし、またある日は酒を呑み心底をさらけ出す。それらはそれまでの親元では決して存在しなかったような滅茶苦茶な生活であり、また過去の価値観を覆す毎日であった。親や社会から与えられた価値観に対する根底からの疑問とその解決の繰り返しである。

それまでの知識・経験はひとから与えられた偏見であることが少なくない。これを自らの手で検証するところにその人の獨創性を培う下地があるようなことを若き日に聞いたことがある。これが、旧制高校寮にあったのだ。少なくとも著者が経験した大学の寮にもあったと思われる。同レベルの仲間と四六時中顔つきあわせて人間的にも総合的に相当揉まれたはずであるし、このあたりに寮で生活してみなければ、わからない価値が潜んでいたようである。

当時の旧制高校の寮生活の思い出は『ストーム』と『寮雨』であったという。ストームで窓ガラスを割って寮主任から二、三枚の始末書をとられ、そのために翌年は入寮不許可で北田町に下宿生活となった白石の思い出がある。ところで、ストームとは生徒たちが紋付と袴に下駄履きの出で立ちで、「富士の白雪ノエ」を歌いながら宿舎の廊下をガタガタ音を立てて歩き、皆をたたき起こす。記念祭の時などは街に出て、松江大橋の行き着くところ、たもとに交番があつて看板をはずしたり、巡查を冷やかしたりする悪さをしたが、大目に見られた。酔うと二階の窓から並んで一階に放尿するのを当時『寮雨』と言ったそうである。

著者が寮生であつた大学紛争以前にはこのようなことが伝統として一部残つていた。寮生活で出会わした人間関係は熱いもので、終生のつながりをもつ。したがって他の同級生以上

と同級生に漏らしていた。寮では、白石は陸上競技部の仲間と同級生の小山定と北一寮で同室を楽しんだと言っていた。二人とも正直屋と呼ばれるオデン屋と東京庵と名を打つウドン屋に、いわば高校生の溜まり場によく出入りした。自習寮では門限十時に遅れるとノートにその理由を書いた。その時の理由としての活動写真見物のことを『活見（かつけん）』といった。朝寝坊が常習で授業はともかく試験にも遅れて、温情に助けられたことがあった。翌年は一学期が南二寮で二学期からは北堀の水木先生宅に近い持田久栄宅で鹿野明と同宿して、彼の優しい心根に恵まれ、卒業まで楽しい下宿気分を味わうことができた。時には、水木先生の麻雀の相手もした。寮歌の指導やストームなど共通の思い出と一種の治外法権的社会的寮内は政治活動も比較的自由に行える場所でもあった。

奥野と同期で親友の田島と机を並べた十四期理甲生の俣野弥造が『嵩のふもとに』で寮生活語っている。自習寮に入った満州事変後の比較的安定な時期に白石のようにクラス会の幹事として活躍し、周囲からも定評があったことが推測される。何といっても親元を離れ自主的な生活ができたこと、それに比較的良好な食事の寮生活は快適であったという。娯楽室には雑誌やレコードも揃っており、囲碁、将棋もできて、一室二名であった。あのぬくもりに満ちた生活を懐かしむ彼らの心は、戦後二十年頃に著者が経験した寮生活に酷似していることに改めて驚かせられる。戦争に突入するまでの束の間の平和でもあった時代の良き青春の思い出である。二十八期生まで続いた寮生活をかくも愛した若者の心情はもっと知ってしかるべき価値を含むものである。

## 同僚とともに

日本の当時の代表的哲学者の一人で同僚の高橋敬視教授にハルトマンを紹介し、その翻訳にカルシュ自身が協力したことが知られている。稀代の学者といわれ、日本政府の期待から海外留学した秀才であった彼の薫陶を受けて哲学に進んだ七期文乙生の中西利理の姪が著者に手記を寄せてくれたことがある。

ハルトマンの弟子であるカルシュの学問的興味は哲学史と人の意識の進化に関することであり、古代のインド、中国、ギリシャの哲学から始まる有史以来の人の思考が、すなわち哲学がどのようなように変化してきたのかを示すことであった。そしてハルトマンの世界との一体化

の方法論、そしてカントとの比較論述を意図するところであった。さらに、シュタイナーの哲学が如何にカント哲学の認識論の概念に深く関わっているかを示そうとするものであった。それが行動的人智学者としての学問や内的修練を通じたカルシュの関心であったし、高橋敬視が同調できることでもあった。

物質にあまりにも依存している世界で自らが生きていくために、画家の青木繁が古代に見られるような大きな想像力を培うことに自らの生きる支柱を求めたことをフリッツは知った。



教務室でのカルシュ博士

由ヴァルドルフ学校)で教育を受け、  
 大学卒業後は母校で長年にわたって教鞭を執ることに  
 なった。



松江高等学校卒業時の職員一同  
 最前列左二番目がカルシュ博士  
 (1928年第六期生卒業アルバム 澤田の提供)

『存在論の基礎付け』、『歴史哲学基礎論』、『可能性と現実性』、『実在的世界の構造』など、ハルトマンの著書の翻訳を相次いで成し遂げた。そしてまた、フリッツ自身は親友の長屋と共に『ハルトマンの哲学』を書き著した。こうした中でフリッツは徐々に、日独文化協会にも招かれ、ときには講演を依頼されるようになった。娘のメヒテルトは散歩に誘われたときにはフリッツと行動をとにした。この折に、平易な言葉で人智学の基本に関する手ほどきを受けた。これは後の彼女の生き方に重要な影響を与えた。妹のフリーデルンにはメヒテルトは遊び相手になりながら、その手ほどきをしたそうである。実際に、妹は、戦後にマールブルクのシュタイナー学校(自



同僚との懇親会



同僚とともに 左から  
 カルシュ、小松、小林、藤野

った。鈴木と同郷の哲学者西田幾多郎も紹介されて親交をもった。  
 同僚の高橋は自らもハルトマンに大きな興味をいだいて原書を取り寄せ、カルシュに翻訳の協力を要請した。ハルトマンを研究し、『倫理学』

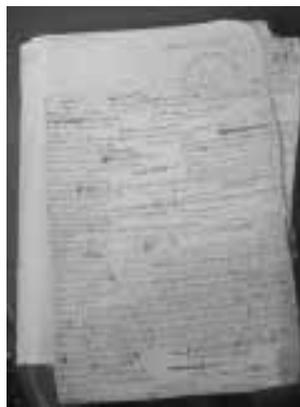
これをもとに自分の存在基盤が日本に、しかも古代神話や天平文化にあり、それらが脈々と息づく出雲の国にあることを知った。そして、日本こそ、いや出雲地方こそ自分の存在の総ての原点であるとの確信を得たという。このような経緯からもフリッツは日本の宗教との緊密な関係を保とうとした。また、修行の経験を経て、金沢出身の仏教哲学者の鈴木大拙と親しくつき合った。戦後も彼はマールブルクに住むカルシュ夫妻を訪ね、その旧交を暖める程であ



松江高校ドイツ語教授 高畑喜市  
 カルシュ 小林松次郎 原田和三郎

## 研鑽の跡

カルシュは哲学者として、毎日欠かさず自宅の書齋のデスクに向かった。学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかに関心があつてそれをこの地で実践してきた。その中であつて、ヨーロッパは物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられてしまったこと、そして、その根本の精神の欠落している性急な歩みに対しては折に触れて批判してきた。また、物質文明が流れ込んできた日本でも自らを支える精神的根拠として、自らの支柱を求める必要を感じていた。それゆえ、人間を肯定するために自らの心の中に仮象の世界を描き、仮象の社会を実現し、そこで生きることを目指すことが重要であること、そして想像力により構築した仮象の世界に自らを没入し、物の社会から脱却することの重要性を継続的に学んできた。



カルシュ肉筆原稿

したがって、生命観を日本の古代のなかに求めて、仮象の力を現実の生活のなかに実現するという自らの根底の思想が日本



フリッツ・カルシュの著書



カルシュの教授室 松江高等学校

の古代神話や天平文化が脈々と息づく出雲の国の生活に合致するのを感覚的に納得できた。それは、任地で大山を見たときの感動と感覚に似たものであつたし、自らの今の状況が天の準備した整合性に即した帰結であるとの思いにまで到つた。すなわち、日本こそ、生涯かつて追求すべきものを見出すための拠り所であるとの確信を得た。

しかし、カルシュはヨーロッパ批判だけではなく、これとは別にヨーロッパの精神に根ざす文化のすばらしさを生徒に伝えるという大きな観点と使命感をもっていた。そして、同時に、学問や内的修練を通して、シュタイナーの思考の実践と仮象との一体化を通じて自らの精神を磨きあげたいとも思つていた。それゆえ、シュタイナーが唱えた思考への関心と到達に向かつてこの松江でずっと実践活動を行つてきた。

一九三九年（昭和十四年）、契約任期が満ちてフリッツ・カルシュ博士が帰国することになった。日本で買い集めた珍しい物の荷造りや帰国の準備が終わつて、生徒による送別会も行われていた。日本を去るに当たつて、正確を期するために、ドイツ語で来し方行く末、そして日本や松江の風景、出会つた人柄の印象を自宅の書齋でしたためた。その記録が残っている。これで、日本ともお別れだ。子どもの教育も考えねばならない。しかし、松江を去るのは何とも寂しい気がした。

当時の哲学者としての彼の学問的成果は一万五千頁に及ぶメモとして、未刊行のまま一時的にスイス・バーゼルドルナツハの

ゲーテアヌムに預けてあったが、家族の手に戻されて、現在は米国テネシー州チャタヌーガのメヒテルトの自宅に保存されている。ふと、この地での資料保存と人的交流の国際性を思った。著者の最初の学術論文は一九七二年(昭和四十七年)にドイツ語で書いたが、鎌倉に住むバーゼル出身のイエルク・シュタツハーとその父母ハンスとヴァレリーに校正してもらったことがある。ドイツ留学中にこの地を一度訪ねた。遠い昔の思い出である。このバーゼルには三ヶ国コーナー(ドライ・レンダー・エツケ)がある。一度にドイツ・フランス・スイスの三ヶ国に立てる、境界らしからぬ国境がある。これを改めて思い出した。こんなところにもカルシュとの縁があったのか。実にこの国境は彼の国境を超える人の心の内を象徴しているように思えるものである。

## アクセンフェルト教授

肉親との親交と観光の予定をこなしたカルシュの妻エンメラの伯父テオドル・アクセンフェルトが日本眼科学会の招きで一九三〇年(昭和五年)四月二十二日に岡山医科大学を訪ねた。フライブルク大学医学部の眼科学教授である彼はモラクセラ・ラクナータの発見者で、世界的に著名な医学者であった。因みに、この菌は結膜炎・眼瞼炎・角膜潰瘍などの感染症の原因となる膜の常在菌である。弟子の有澤郷一博士の骨折りもあって大阪の訪問を終えて、岡山を訪問した。ここで講演と歓迎会を済ませた彼は岡山の随行員とともに、翌日の二十三日に九州に向かった。もちろんカルシュも同行した。夕刻にアクセンフェルト教授と息子ヘルムート一行は博多駅に着いた。この折、新聞記事に使ったフラッシュ



アクセンフェルト博士とともに 大阪にて



1930年4月22日 岡山医科大学眼科学科

に九州に向かった。もちろんカルシュも同行した。夕刻にアクセンフェルト教授と息子ヘルムート一行は博多駅に着いた。この折、新聞記事に使ったフラッシュ撮影のユ撮影の写真が残っている。左から右にヘルムート、田



アクセンフェルト博士  
大阪でのくつろぎの時



ボーデン湖畔でブランコ遊び

授として日本からの留学生の指導にあたったことと戦後に草津での定期音楽会を晩年まで開催したことからも明らかである。彼女はテオドール



エンメラ、エディットおよびゴットフリート



メヒテルトを挟んだ祖父母、後ろはエディット

## 歴史の中で

ドイツに一時帰国したとき、メヒテルトはその様子をお祖母ちゃんの思い出として著者に語ってくれた。メヒテルト達が過ごしたのはボーデン湖のそばの家で、ブランコ遊びは最も記憶に残るものであった。湖の傍で祖父母と一緒に撮った写真が残っており、当時が偲ばれる。その中の写真のうち、エンメラと父ゴットフリートの間に写っている若き日のエディットを映した珍しい写真がある。彼女自身の日本との密接な関係は、肉親を通じた間接的なものではなく、フライブルク国立音楽大学教



有澤郷一博士

演を聞いた。これが増田の将来の方向を大きく決めた。実際、彼は後に眼科学を専門とし、久留米大学で多くの弟子を育成した。増田は講演の折に、カルシユの姿を目撃していたが、残念ながら言葉之交わすことはなかった。懐かしい彼の思い出であった。著者は増田から生前、博多で「馳走になりながら、この話を聞いたことがある。しかし残念なことに、三十年間、眼科学をフライブルク大学で指導してきた偉大な教授は帰国間もなく、一九三〇年七月二十九日に亡くなった。六十三歳であった。それから、五年後宮下博士らの手でカルシユを招いて追悼の会が東京で催された。



1930年4月23日 博多駅に着いた  
アクセンフェルト教授一行



1935年7月宮下博士《左から2人目》  
の呼びかけによるアクセンフェルト教授  
追悼のための午餐会

原教授、その後がA・シユパン博士、庄司教授、アクセンフェルト教授、下宮教授、カルシユ博士、その後には鹿子木員信（かのこぎかずのぶ）教授が映っている。九州帝大では世界的な医学者の盛大な歓迎会が開かれた。カルシユの教え子である六期理乙生の増田義哉が学生としてアクセンフェルト教授の講



1931年イタリア・コモのファシスト集会

ル・アクセンフェルト教授の末娘であって、世界的なピアニストであり、チェンバリストで二〇〇一年（平成十三年）四月に亡くなった。一九三七年（昭和十二年）のショパンコンクールで優賞したピアニストで、母エンメラの従妹であったが、メヒテルトはタンテ（お

ばさん）と呼んでいた。亡くなった時に

は、ドイツのシュピーゲル誌に大きく哀悼の記事が掲げられた。

今から約二百年前のライン河岸のセイント・ゴア市長で富豪のラツァルス・セイント・ゴアの子孫であるヘルベルトはカルシュの長女メヒテルトの夫である。彼はアメリカ兵としてバルジ作戦に参加した亡命ユダヤ系ドイツ人である。戦後の処理時にミュン



1931年10月20日  
イスマイリア付近 スエズ運河にて



1931年10月15日朝  
ストロンボリの全景 蒸気船ザールブリュッケンより



ヘルベルトが押収したフィルムから構成されたビデオを眺めている様子



セイロンで見た  
象と人との交流

ヘンでヒトラーの私設操縦士でカメラマンであったハンズ・パウアーを尋問した際に、彼からヒトラーに関する十六ミリフィルム十六巻を押収し、そのうち四巻を自宅に保存していた。これらは約半世紀後にシュピーゲル社が譲り受け、同社の著名な前述の雑誌に発後、ドイツアーカイブとして現在厳重保管されている。

フィルム売却後に構成された番組のビデオ映像をチャタヌーガの自宅で著者に紹介してくれた。そのときの写真を載せた。

ここで、話を一九三一年（昭和六年）に戻すが、カルシュはイタリアのコモで行ったファシストの大集会や上空を飛びまわる航空機の写真を記録している。また、海面下の火山体が二、〇〇〇呎にも達するという活火山が海底から突き出した形になっている島をも記録している。溶岩を火口周辺に吹き上げる噴火が特徴で、ストロンボリ式噴火と呼ばれる。これらはすべてカルシュの撮影である。さらに当時の蒸気船がスエズ運河西岸イスマイリア (Ismailia) を通航する様子を写真で残している。一八六三年（文久三年）、スエズ運河が着工された際に

表し、さらにテレビ放送したベルリンの博物館に寄贈され、

レセップスによって建設された街で、運河のほぼ中間地点に位置した交通の要衝である。当時のエジプト国王イスマール・パシヤの名が街に付与された。

カルシュー一行は十月に帰国しているが、その間に、紅海で遭遇したイルカの群は壮観であった。船から見下ろす光景の記録を残している。それから、しばらくインド洋を南下して、セイロンに立ち寄った。ここで見たのが人と交流する象であり、猿の集団であった。小さなメヒテルトが船中で一緒であったミアーズの子供らとともに餌を与えたが、猿が危険な動物なので父フリッツに注意されてやめたそうである。後にカルシューは日本の高床式の神社の様相の原型がこのポリネシア近辺にあることを知り、自らのこうした縁（えにし）の連鎖を考えていたという。そして、さらに当時日本の占領下にあった釜山に寄り、古墳を眺め、典型的な民族服の婦人を撮影している。父母の記憶を経て自分に伝えられた思い出を著者に語ってくれた。



1931年 シンガポール  
カランプールマレー



1931年 シンガポール プランリークス



1931年 韓国慶州あたりの古墳であろう



長野県松本における菊祭



読書中のエンメラ

エンメラが編み物の手を休めて  
そう付け加えた。  
しかし、あれ程親しかった多田  
教授が急逝した。脳裏を過ぎる  
のは来日以来、親しくしていた  
夫妻と共に、各地を旅行したこ  
とである。何という素晴らしい  
同僚であったか。他の同僚、職  
員も同様であるのだが。そんな  
こともあって、カルシユの心は

りは、公式の記録とともに著  
者がメヒテルトの記憶を元に  
して、すでに明らかにしてい  
るので、これまで不明であっ  
た部屋の様子から彼等の生活  
を推測することができる。  
「日本へきてよかった。みん  
な親切だ。それに礼儀がただ  
しく……」



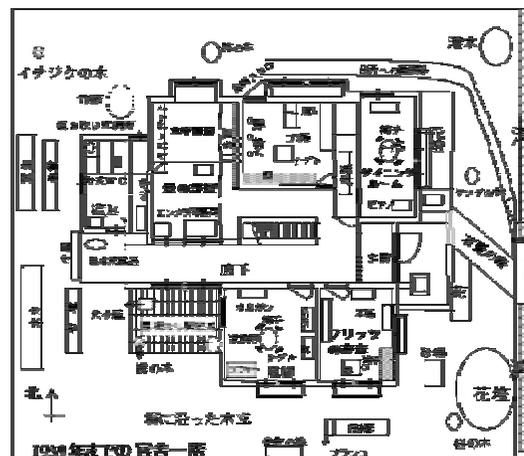
官舎の居間



官舎の居間

## 官舎の暮らし

エンメラは異国にあって気候に順応できず、孤独を紛らわすため  
にも、樹木を植え、花壇を造って、手入れをすることが日課であっ  
た。多田義延夫人のお陰で、



家屋の見取図と1934年頃の庭の様子

菊の花を大輪に栽培するこ  
ともできるようになった。  
これら情緒豊かな庭を包む  
建物のなかで犬も共に暮ら  
した。ここでは、動物も植  
物も同様に自分そのもので  
不可分の関係にあった。多  
田夫人とは松本まで夫婦そ  
ろって菊を見に出かけたこともあった。その時の写  
真がある。官舎で落ち着いた夕べのひとときは、フ  
リッツはエンメラと共に過ごした。メヒテルトが生  
まれる前のことである。夕食がすむと、彼は手を休  
めてエンメラに向き直る。その舞台となったダイニ  
ングルームと居間の写真が見つかった。官舎の間取



居間のドアで犬と戯れるエンメラ



庭の様子を描いたカルシュ自筆絵画

ったとのことである。

日本を深く愛し、人々を慈しみ、自分のもてる知識を惜しみなく生徒に伝えようと努力している。それが彼女にはよく分かる。前頁の三枚の写真は二階の正面のエンメラの寝室と居間の様子である。ふたりとも、ドイツから取り寄せた書籍や、肌身離さず愛用していた聖書を就寝前に読んでいたという。このような敬虔さとともに、玄関を開けたときに家の内側から見える庭の様子を画に描いたものを貼り付けてお客を驚かさような茶目つけを見せるカルシュでもあ

## クリスマス

大正天皇の崩御から約一年後の昭和二年十二月、夫妻は日本での三度目のクリスマスを迎えた。ドイツの家族から届いたクリスマスカードが丁寧に置かれている様子やクリスマスツリーの全景の写真がある。夫妻がソファに座り、クリスマス



1927年クリスマスの贈り物

スソングを歌いながら、ドイツのクリスマスの特徴である静かな聖なる夜を過ごしたことは想像に固くない。

著者が三十五年前

に留学していたドイツ・エルランゲンで、今も付き合いのある友人のドイツ人ペーター・レードレル博士とアメリカ人ノートン・ヤング教授のそれぞれの家庭のクリスマスを体験することができた。滞在していたエルランゲンの街の様子はもちろんであるが、カルシュに関する調査に協力してくれた旧友アンドレアス・シュティーフそしてユルゲン・ハース医師らとともにプラハのクリスマスを覗いたことも印象に残っている。



1927年クリスマスの装飾

そこからドイツへの帰路に世界で最も美味と云われるピルゼン・ビールを楽しんだことも思い出した。一九七四年（昭和四十九年）のクリスマスのことであった。

ところで、一九二七年（昭和二年）のクリスマスは初めての子を心待ちにしていたカルシュ夫妻の喜びの日々であった。メヒテルトが生まれる二ヶ月前のことで、日本人からも前祝が届いていた様子が写真から窺える。ところでメヒテルトから直接聞いた言葉であったが、いささか母エンメラに機能障害があつて、一九二一年（大正十年）に結婚して以来、子をもつことができなかつた。しかし、この年の春に神戸を訪れ、ヘルテル医師の治療を受けたとのことである。こうして、自分が、神の加護と父の友人のおかげで、そして何よりも父母のおかげで命を授かったとのことである。このように極めて、プライベートルな事柄を通して、著者に対する大きな信頼を寄せてくれたことに改めて深く感謝している。

写真には生まれて十ヶ月のメヒテルトのために両親が用意した人形が飾られている。このときがきっかけになつたのであろうか、父フリッツは娘のメヒテルトに数多くの人形を用意するようになつた。実際に、彼女はこうした人形と一人遊びをしたし、八十三歳の今に至っても自宅の二階の飾り棚にはおびただしい数の人形が整然と飾られているだけでなく、大きな人形は並んでソファに行儀良くお座りしている。



1927年クリスマスの装飾

また、当時、クリスマスには斜向かいの渡部家の忠・紀代子・順がカルシュ家に招待された。黒パンが珍しかった。この材料は神戸で手に入れ、エンメラが自ら焼いたものであった。バターは北海道から手に入れた。

復活祭には、種々色塗られたゆで卵を紀代子が貰つたという。オースタハーゼと呼ばれるウサギが子供達に置いていく卵といわれる。赤カブとタマネギの皮を使って卵を染めたとメヒテルトが教えてくれた。渡部家では正月にカルシュ夫妻を家に招いて餅を、またお雑煮やおせち料理を御馳走したことがある。

夏休みになつて、フリッツとは別に、エンメラがメヒテルトを連れて軽井沢に出かけようとしたときのことである。飼つていた黒い犬のポチが道端の排水溝のなかで口に物を突き刺し死んでしまった。そのとき、その嘆き悲しむエンメラの様子を紀代子が印象深く目撃したことを語ってくれた。軽井沢に行っている間は、紀代子が猫を預かつたという。

ところで、二〇〇三年（平成十五年）の暮れに、偶然に一九一三年（大正二年）生まれの右隣家の桑田武一郎と出会つた。桑田の母親ハルがメヒテルトから受けとつた手紙を見せてくれた。また当時のこと、カルシュ家のお手伝いが砂糖を買ってきたとき、袋の縁を叩いて、大事に容器に移す様子を見たという。そしてドイツ人というものは《そういうこと》



1928年クリスマスの装飾

を丁寧にやるのかと感心したという。実際ドイツ人は無駄をしないことを著者もドイツ留学時に何度も眼にしている。官舎の火事的时候はこの桑田家の奥まで、彼がカルシユ家の荷を運んだ。渡部宅が庭も広く、当時高校生の長男の渡部忠がいわゆる《火事場の馬鹿力》で、とにかく夢中で荷物を運んだということである。このときのメヒテルトの体験は日本に対する独特の感情を植え付けるものであった。

## 日本の母

カルシユ家にとって極めて重要な日本人女性がいます。というより、メヒテルトにとって、どれほど重要な意味をもったかわからない、今もなお「日本の母」と呼ぶ、錦織君枝がいます。

カルシユの住居の官舎の門から眺めた奥谷の様子である。



君枝の背のぬくもりを  
記憶するメヒテルト

このあたりの住居の官舎の門から眺めた奥谷の生活がカルシユの教育を語るための基本的な視点になる。写真は、錦織君枝と一緒に買い物に出かけるメヒテルトにエン



奥谷の官舎の門から南方向を臨む

メルが何やら注意をしているところを物語っている。「君枝さんから離れてはいけませんよ。いうことを聞いて、いい子にしているのよ。おいたをしてはだめよ」と言う訳で、メヒテルトは、ややうんざりであったとのことである。玄関には自転車が立てかけてある。かの五



1926年夏 奥谷の洪水



メヒテルトとエレナ

杖をついたカルシュが隣のエレナ、メヒテルトと一緒に映った珍しい写真があるが、この杖は現在フリーデルンがマールブルクの自宅に保存しており、著者はこれを見せてもらったことがある。当時、カルシュは四十代の若さであったから、どこか遠出をしての帰りであったのであろう。西側から見た官舎やその台所から眺めた様子が何枚か残っている。興味深いのは一九二六年（大正十五年）に奥谷が大雨で洪水になった



エレナ・メヒテルト・カルシュ

ときの蛇の目姿の写真である。向側は渡部家で、これと同じ場所を同じ角度から撮影した写真があるので、同じ部屋の窓からの撮影であらう。ここには火事の時お世話になった忠と紀代子と順の兄弟がいて、末の順は五歳違いであったが、母親同士の交流が頻繁にあった。なお、隣に住んでいたウッドマン家の娘のエレーナとメヒテルトが親しく一緒に撮った写真が見つかっている。

期理乙生の酒井勝郎とのエピソードに登場する自転車であらう。遠い昔の思い出である。そんなことを自宅近くのテネシー河沿いに住む子や孫たちにメヒテルトは何度か話して聞かせたという。現在は息子のエドワードの家で夕食をする毎日である。親孝行な息子のことを語りながら、恵まれていた自分の人生を回想してくれた。私的なことになるが、エドワード、著者、フリーデルン、メヒテルト、著者の母の年齢差がいずれも九歳であること、また著者がシュトゥットガルトの小さなホテルで偶然にフリーデルンに出会ったのが一九九九年九月で、「九」が因縁のように連鎖していたことが頭から離れない。しかし、それにもまして、名前すら知らなかったカルシュと「出会った」のは彼女を通じてとはいえず、それ以前の偶然のできごとや人との出会い、そして因果を思わせる不思議な現象のなせる技であることを著者はメヒテルトとともに感慨深く語りあったものである。

「日本の母」君枝はメヒテルトの人生に最も大きな影響を与えたうちの一人である。一九六八年（昭和四十三年）にカルシュがメヒテルトを伴って来日した時のNHKのインタビューで君枝は幼いころのメヒテルトの様子を語っている。メヒテルトには自分の養育を任せられた彼女の子守唄とおんぶされた遠い昔の背のぬくもりが今でも鮮明に蘇るといふ。彼女のおんぶ姿の写真が何枚か残っている。二〇〇〇年（平成十二年）の秋に、君枝の娘の電話番号を突き止め、当時のことを尋ねようとしたことがあったが、残念ながら、母の君枝からは特別には何も伝わっていなかったようであった。

## 斜向かい

奥谷の官舎の斜向かいに渡部家の家がある。今と同じ位置にあった当時の家は戸主が愛之助であった。彼は松江高校創立以来学務を担当し、生徒にも何かと頼りにされた人である。一九三〇年（昭和五年）六月に新しい木造の家屋の建築が始まった。カルシュにとつては、その工程がとてもめずらしかったのである。地ならしから始まり、土台が組まれ、少しずつ、家らしくなっていく様子を記録していた。敷地を整地して、地盤固めをすることこの地方では「地形（じがた）」と云いその場所は地形場といった。棟上げ式も終え、これから本格的な建築に入る頃に、メヒテルトが父フリッツに投げかけた質問を耳にしたエンメラの思い出話である。

「おそとで、あれ、何しているの？ファティ」  
「おうちを建てているんだよ」  
「この前は地面を固めていたわね。そのためだったの？」



作業の合間休息時



土台石の基礎固め

「そうだよ」  
「本当？ムティ」  
「そうよ」  
「ドイツもそうなの？」  
「いや、ドイツとは違うさ」  
メヒテルは二歳五ヶ月である。このごろおしゃべりになった。彼女はエンメラの丹精こめて作った庭の空き地にあるブランコを見ながら父フリッツにきいた。

建築の様子を追ってカルシュが撮影した写真が残っているのは著者には驚きであった。それを聞いて意外に驚かなかったのはこの家に完成後に住んだ渡部家の長女の（竹内）紀代子である。というのは、当時小学校四年生で春日神社の近くに仮住していた彼女がつぶさに、カルシュの行動を目撃していたからである。彼女によれば、カルシュは毎日学校から戻ると二階の窓にカメラを据えては、よく撮影をしていた。最初は「よいとまけ」を歌いながら腰のどっしりとした地下足袋をはいた女性の姿を撮っていたという。そして、夕暮れ一杯までの作業の後に、



渡部家の家屋



渡部家の棟上げ式

渡部家から毎日運ばれていた酒肴

で一日を締め括っていた様子はカルシュにとつては、とても興味深いものだったことであろう。実際、棟上げの様子も詳しく撮影している。もっといろいろと紀代子の娘の信子が聞き出そうとしたが、当時九歳の少女であった紀代子にはこれ以上の記憶はないようであったとのことである。

### 奥谷の雪景色

湿気が多い雪が積った日の夕方近い頃であろうか、人通りのない奥谷のあたりの様子である。官舎に面した通りの雪景色のたたずまいが何とも美しい。まさに、唄にも歌われている「綿帽子をかぶった」ようである。ドイツの乾燥した雪景色とは異なる奥谷の風情である。

官舎の窓から撮った写真は向かい側の渡部愛之助宅を映している。彼の二人の息子が旧制松江高校に入学した。長男忠は十六期文甲生で卒業後は日本興行銀行で、弟順は二十期文甲生で日本レイヨン総合研究所で活躍した。どちらも英語を主とする甲類を選んだのでウッドマン家との交流もあった。一九三七年、ウッドマン家が火事の時には桑田武一郎と一緒に、長男の忠が桑田家に隣接するカルシュ家の荷物を自分の庭に運び出した。

他に、雪嵐に続く大雪により屋根雪が通常の三倍ほど積もった様子が見られる。このときは生徒がカルシュのことを心配して、雪下ろしの手伝いにわざわざやってきたという。その写真が何枚か残っている。

ついでの話になるが、後年のこと、生徒が雨の日に官舎の窓に向かってカルシュ博士を慕っ



雪に包まれた奥谷の通りの家々

て大声で叫んでいたことがあった。メヒテルトには最初は、何が起こったか解らなかったが、彼女は、そんな光景を今も余韻をもって思い出すこ

とがある。

事実、十期理  
乙生の矢崎憲  
正が、このこ  
とを目撃した  
との手記を著  
者宛に寄せて  
いる。クリス



官舎の窓から見た雪景色

ては、その後で、表情を作り替えて楽しんだのこ  
とである。もちろん、近所の仲良しと一緒にあった。  
カルシユ夫妻の雪かきの様子の写真もある。  
ところで、メヒテルトが四歳の頃に、雪を食べた

マスのころはいつ  
でも十<sup>セ</sup>以上の上の  
雪が降った。メヒ  
テルトは父と一緒に  
に雪だるまを造つ



雪嵐に続く大雪の様子



雪の庭先



雪かきを終えて



雪が消えゆく官舎の周辺

ームを買って貰って初めて食べたことを語ってくれた。《こんなにおいしいものがあるのか》  
と思えるほどの思い出深い味であった。その値段は十銭であったとのことである。今日ごく  
普通の食べ物であるアイスクリームが、物が豊富に無かった時代にあつては、いまに至つて  
も忘れ得ない幸福感と素晴らしい思い出をメヒテルトの脳裏に刻んでくれていたのであつた。

ことを思い出してくれた。  
その口当たりは冷たく、  
何とも快くおいしかった  
とのことである。それと  
つながる話であるかどう  
かは分からないが、それ  
から数年経ってからであ  
ろうか、母エンメラから  
白のバナラのアイスクリ

## 官舎の庭

官舎の庭には藤棚にかかると藤の花が咲いていた。日本人が好んでこれを簪（かんざし）として使ってきたことをカルシユはメヒテルトに語った。そんな逸話を拙著『湖畔の夕映え』でも触れた。

カルシユ夫妻が来日してから一年余経過した頃、近所に住む多田義延英語教授の夫人の指導のもとで育てた菊が官舎の庭に咲き乱れた。エンメラは、日本で初めて接した大きな菊をとっても愛した。秋になると咲き乱れるコスモスや菊で前庭はいっぱいであったという。エンメラが菊をとくに愛していたことを示すものとして、松本の菊展の写真も何枚か

残している。



菊の咲き乱れる庭での二匹の飼い犬  
(ポチとビリー)

カルシユ夫妻とメヒテルトが一緒に、いろいろな草花や樹木を庭で栽培した様子が撮影されている。それらの植物の配置と官舎の見取り図は以前に著者がメヒテルトとフ



官舎の庭



秋の日の官舎でのエンメラ

アックスでやり取りして書き上げ、山陰中央新報に公表したことがある。

犬を飼っていたので、家族の中ではこの庭を動物園と呼んでいた。メヒテルトの動物好きの起源はこの頃にあるようである。犬はポチとビリーである。エンメラのお気に入りであり、戯れる様子の写真を数多く残している。

十三期理乙生の遠藤捨雄は、カルシユとは写真を通じて親しい関係だったこともあって、彼がカルシユの自宅に招待されたときの庭の印象を思い

出として著者に生前に語ってくれた。

これがきっかけでメヒテルトに庭の様子を訊ねてみる気になったものである。

当時、庭には砂場があり、ブランコと一緒に《金魚の池》



庭のコスモスと藤棚



育てていた蜜柑の木から  
158個収穫できた。



生徒の撮影によるカルシユ家

もあって、そこは子供の楽しい遊び場であった。和服姿の子供のブランコに乗った写真も残っている。この庭では、結構たくさんミカンを収穫できた。このときのたわわに実ったミカンの様子を想像できるような写真が残っている。残念ながら時期はわからないが、塀の背後に英語教師の消失前の官舎がわずかに映っているので火事になる一九三七年以前の撮影であることに間違いない。

近隣との付き合い

親しい友と

カルシュ博士にとって来日から間もない頃の近所づき合いは、英語担当の多田義延教授であった。公私ともに、何かにつけ、深いつき合いがあった大きな証拠は、一九三五年



1926年 自宅での多田義延

は、一九三五年（昭和五年）に生まれた長男のゴットフリートに彼の名である「Yoshinobu」をミドルネームに選んだことにある。写真は近所に住む多田宅を訪れたときの庭での夫妻の和服姿である。日本の心を知るためにもカルシュは和服を好んで着たといい、妻のエンメラも和服をいつまでも大事にしていた。ドイツ・マールブルク在住の次女のフリーデルンの自宅のタンス



1926年 多田宅でのカルシュ夫妻



1926年 多田義延宅の庭



多田宅にて 多田夫人とともに



高畑喜市ドイツ語教授

に和服が保存されていた。その状態がとても良かったのを眼にしたことがある。記録とメヒテルトからの伝聞によると夫妻共々数多くの景勝地を旅行したことがわかってる。多田は残念ながら、知己を得て間もない二年後の一九二七年（昭和二年）十月

九日夕刻に急逝した。来日以来、エンメラは多田夫妻と行動を共にすることが多かったの

で、自宅付近や旅行中に一緒に撮った写真がたくさん残っている。菊の育てかたを丁寧

に指導してくれた多田夫人の勧めもあって、エンメラは写真に

写る近所の若い人々を官舎に招いてはドイツ料理

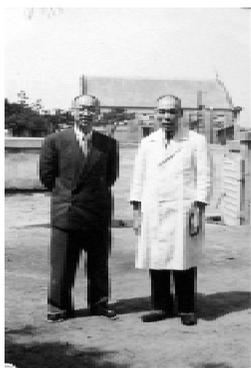
やドイツの作法を教えたことがわかってる。

しかし、多田義延の死後、夫人はこの地を去り実家



ハーマヘル牧師

白衣が有光医師



白衣が有光医師

に戻ったという。

同年代の子供をもつ近所とのつきあいのなかでエンメラが一緒に映った一九三九年（昭和十四年）二月の珍しい写真がある。官舎のすぐ裏の高橋寛丈教授の家の庭でお別れパーティを開いた。カルシュの同僚の夫人と娘が集まった。左から原田夫人、タカノウチ夫人、藤野夫人、高橋夫人：；であった。メヒテルトはよく顔を合わせた人々であったが、すべてを記憶しているわけではないとのことである。なお、下段の写真は夏休みに、軽井沢に出かける直前に撮った写真である。



近所の人々とともに

エンメラは寂しさも手伝ってドイツ語での会話を求めていた。それゆえ宗派は異なるがハーマツヘル牧師とのつきあいもあつた。有光小児科医とのつきあいも少なくとも、長男ゴットフリート、次女フリーデルンの生まれる際にもお世話になっている。

眼を閉じて当時のことを思い出しながら、斜向いの渡部愛之助の家のことも話してく



エンメラと彼女の生徒たち



女学生時代の  
竹内（渡部）紀代子

れた。娘の紀代子はメヒテルトより八歳年上である。乳母車を押しているメヒテルトを路上で何度も目撃したという。実際、夏の軽井沢の避暑では動物の世話を何度も引き受けてくれた。なお、隣に住んでいたウッドマン家の娘のモニカが近所の家つつかっている。豪快な女の子であったことが伝わっているが、動物を可愛がるやさしい女の子であった。



重野夫人とフミ子 官舎の庭で



隣人のモニカ・ウッドマン



メヒテルトのお気に入りの人形

カルシュは、端午の節句に近所に立てかけられた鯉のぼりを眼にした。風を口から大きく流し込んで、お腹にため込んだそのエネルギーで大空を泳ぎ回る。男のこどもの確かな成長への親の願いをこれほど端的に表したものがあろうか。メヒテルトが生まれてからは、フリッツは彼女のために、人形を買ってくれたし、雛祭りにも心を配ってくれた。成長する



教訓名画集の表紙

につれ、近所の子供とのつきあいの中で、講談社の絵本もすべて揃えてくれた。寝る前には一人で本を読んだ。日本的な倫理感を併せもつ彼女の感性の原点でもある。絵本は今でも手許においてある。みんなが学校にいる間は、一人でさびしかったが、本を読んで過ごした。その時に培った日本的な感覚は今に続いているという。これらの本を、現在はメヒテルトとフリーデルンが分けて所有している。失った分は戦後に

なって、アメリカの書店を経て、注文のうえ取り寄せた。子供にとっては宝物であった。絵本の裏には、自分の名前を日本語で自ら書いている。本来発音から言えばメヒテルトと書くのであろうが、自身はメヒテルトと書いていた。今もそのように書くので、著者が彼女を紹介するときには、日本語では常にメヒテルトと記してきた。ついでに、母の名前はエツメラであるが、当時の呼称に近い音であるエンメラのように綴った。彼女は幼い頃から父の影響もあつて、日本の神話を好んでよく絵本で読んだという。父フリッツが古代の日本人の大きな発想を好んでいたからであろう。それも、童話とともに美しい思い出として心に刻まれているという。神話は、近所の小さな友達はみんなそれぞれ知っていたことであり、父と一緒に再来日したときにも奉納山では一緒に思い出すことができた。



メヒテルトのお気に入りの人形と羽子板

形遊びをした。彼女たちが学校に行っている間は、学校に行かなかったメヒテルトは家庭教師の中村(石飛)フデ子について日本語を学んだ。母からも折に触れて教育を受けたが、一人でよく人形遊びをしたし、時には人形に自分の思いを話しかけたという。今も、当時と同じような配置で人形を飾っている。アメリカ・チャタヌーガの自宅のソファベッドに置いてあった古びた人形の一つの姿がとても印象的であった。

## 幼な馴染み

一九三九年（昭和十四年）春、ドイツへの帰国の時が迫っていた。松江を去るのは何とも寂しい気がする。メヒテルトも近所の仲良しとお別れの小さなパーティーを開いて、名残を惜しんだ。今も当時の仲良しのことを懐かしく鮮明に思い出す。魚屋の娘の西村チヨ子が《あそびや》といって、官舎によく誘いに来た。彼女は遊び仲間であったが、帰国前年に亡くなった。



高橋トシ子とともに

写真に写っているのは最



近所の仲良しと一緒に 永田フミ子、高橋トシ子、高畑キミ子、小豆沢史

も年上のお姉さんの永田フ

ミ子、官舎のすぐ裏に住む四歳年上の高橋トシ子、三歳年上の高畑キミ子、それに妹のような二歳年下の小豆沢史である。

キミ子はドイツ語を話した。みんなの顔が当時のままで浮かぶ。みんなで、かくれんぼ、ままごと、お人形あそび、石けり、かけつ



官舎の隣に住む高橋トシ子とメヒテルト および銘々の母親



父フリッツの作った  
ブランコでの遊び

こをして遊んだ。どろんこ遊びは洋服が汚れるといって、させてもらえなかったので、大切な泥こねは、もっぱら史の役目であった。「父さんはいつもニコニコした方でしたが、お母さんが厳しくつけていたんですね」後に再会したときに、メヒテルトが史から聞いたという。カルシュが官舎の庭に子供達のために作った自慢のブランコも《金魚の池》もメヒテルトにとっては思い出深い。ことに自分の庭の水辺はメルヘンの世界であった。

ここで、蛙が跳ぶのを飽きもせ

ず眺めていた。そんな思い出がいまに続いている。ところで、隣の官舎には、大柄でいつも元気なモニカとみんながエナちゃんと呼んでいたかわいいうエレーナが住んでいた。メヒテルトは五、六歳の頃には、毎日夕方三時になると官舎から北の豊かな森や竹やぶ、それに明るい木立が目に入る静かな近くの神社や寺院にカラーストと会いに友達と手をつないで、うたを歌いながら出掛けたものだった。史は春日神社の近くに住んでいた。日常の中で、この娘たちは、神々の国の静かで落ち着いた空気を満喫していた。お日様が沈むと、また手をつないで歌をみんな口ずさみながら、家路を急いだ。不穏な世の中の様相をよそ目に、アメリカとドイツ



官舎の庭の「金魚の池」



エレナ・ウッドマン

と日本が子どもたちの小さな手によってしつかりと結ばれていた。拙著『湖畔の夕映え』には子供の純真な心の交流が描かれていた。しかし、純真な心から親しく遊んだはずのエレナとは後にアメリカで再会できたが友情は継続できなかったという。メヒテルトの顔が曇った。

日本人形を抱えて遊びに行く。メヒテルトの家には、青い目の珍しい人形がたくさんあって、並べて遊んだ。とても楽しかった。日本語の勉強のき

らいな彼女も、このときばかりは日本語が達者であった。でもメヒテルトが十一歳ごろまでのつき合いであった。

みんなで追いかけたメダカやホタルは、いまでは、ほとんど見られない。けれども、朽ちかけた官舎の姿が、このあたり一帯の変わらぬ閑静な雰囲気をもとめている。奥谷の入り口の桑原商店には、子供達が異人さんの食べ物だと思っていた四角の大きな食パンが置いてあった。一般の人々にとっては、パンはアンパン、張り込んでやつとジャムパン、クリームパンであった頃の話だ。店にあったアイスクリームを食べた子供は自慢げに言ったものだ。たいいていの子供は自転車で旗を立ててくるアイスクリンしか知らなかった。また、



1939年3月 松江駅での見送り

京店のまつ屋に行くときすごいごちそうに見えたシュークリームが売られていた。子供達は一度でよいから食べてみたいなどと、ため息をついていた。そんな時代であった。

メヒテルトが十一歳の春、帰国時にあつて松江駅での見送りでは、二歳のフリーデルンが母エンメラの腕に抱かれていた。藤野教授とその娘・高畑夫人とその娘・高橋夫人・お手伝いの大笹トキエなどが写っている。それに、父フリッツが沢山の品を購入した北堀町の掛け物屋の主人の姿も写っている。眼を閉じて当時のことを思い出しながら、懐かしそうに話してくれた。

## 軽井沢での避暑

夏には避暑をかねて、軽井沢にはドイツ人だけでなく、青い目の人々がたくさん集まっていた。カルシュ夫妻は最初はシンチンガー家と一緒に住んだが、一九三三年（昭和八年）から一九三九年（昭和十四年）までは毎年夏には、この地に借用した



1927年7月12日軽井沢の我々の家：シンチンガー・カルシュハウス

通称ハンダヤマの別荘（別荘番号二四六三）で過ごした。現在は道路になっているところである。半田氏は資産家で、多くの森と土地を所有していたと思われる。夏の間そこに住んでいたドイツ人は軽井沢のこのあたりを「フン族の小さな森（Hunnenwäldchen）」と呼んでいた。というのは、著者の推測によれば、おそらく文明から取り残されたという意味で古い民俗名の匈奴（Hunne）という言葉を使ったと思われる。そこは第一次世界大戦の間、多くのドイツ人が



1930年頃 近所の子どもたち

あたかも虜囚市民（Zivilgefangene）のようにして住んでいたからだろうか？ ともかく三笠ホテルのすぐ近くの小さな森であった。ところでこのホテルは設計も建設も日本人の手による明治日本の建築技術の粋を集めた西洋建築様式である。気候もエンメラに合うので、皆がこの時期を楽しみにしていた。

カルシュ博士はここ別荘周辺で思索をし、寸暇を惜しんで哲学史と人の意識の進化に関する研究の原稿に手を加えていた。

メヒテルトは別荘では、いつもぶゆに悩まされた。とにかく、かゆみが我慢の限界を超えていた。一人で時を過ごすことが割合多かった。山から流れてきた水を貯めたプールは汚れた色をしていたが、どうやら衛生上はあまり問題なかったようだ。近くにあって浅間



1933年頃 母エンメラと散策



浅間山 カルシュ自筆パステル画

ぶどうと言われるブルーベリーがとてもおいしかった。そんな思い出がある。

家族みんなのお気に入り、別荘からカルシュは散歩にでかける時にはいつも画用紙を携えて行ったものである。フリッツ自筆の絵は幻想的な題が多い。子供のためにも、よく絵を描いた。その影響もあってメヒテルトも絵を描いている。母方の叔母ユーラの描いた草花の絵やデッサンも残っている。見事だ。全部あわせると九十枚ほどになる。

フリッツは山の絵を好んで描いた。彼自身は終生プロテスタントのクリスチャンであったが、山河、湖沼、海岸や海原に心のやすらぎをもたらす日本古来の神々をそこに見ていたに違いない。想像の世界でも自然を題材にした絵を沢山残している。彼の心を映し出すような軽井沢で描いた浅間山の絵が何枚か残っている。彼はまた、在日中に日本の宗教との緊密な関係をもった。高野山での修行の経験があり、また禪師との交流も幾つかあったようだ。



カルシュー一家の住居(1940-1944)  
横浜山手町の米国人フレージャ所有の家



カルシューの住居内

一九三九年（昭和十四年）ドイツで予備役将校であったカルシューは、自分と親交があったドイツ大使のオットの仲介によって戦場を避け日本で働く命令を受けた。彼は大使館付副武官として一九四〇―四五年（昭和十五―二十年）まで国会議事堂近くのドイツ大使館に勤務した。家族は着任した春から一九四四年（昭和十九年）九月まで横浜山手町四十六Eに居住した。この住居はアメリカ

人のフレージャ氏から借用した。横浜での生活は日本の習慣に根ざした松江での生活とは異っていた。フリッツは毎日大使館に列車で通勤した。そこではもちろん東条内閣時代の軍司令部の高官としばしば職務上で接触していたようだ。彼は家族には一切その話をしなかったが、東京―ベルリン間の通信の暗号化とその解読を行ってきたようだ。すなわち、軍事的諜報活動である。メヒテルトは当時の写真を幾つか保存している。すべては枢軸国間の職務上

のことで、もちろん家族はだれもそれに関与しなかった。メヒテルト自身は一九四〇―四四年（昭和十五―十九年）秋まで大森の東京ドイツ学園に通学し、ここで学んだ。著者も一九六九―七〇年（昭和四十四―四十五年）に大森にあった東京ドイツ学園の日本人のための夜間コース（Abendkurs）でドイツ語を勉強した。この学園は現在は横浜にある。

フレージャ所有の家



1940年頃 近隣との交わり  
横浜山手町 A46E のカルシューの住居



ドイツ人の友の娘たち

は一九四五年春の上空襲で破壊されたが、それより半年近く以前にフリッツのかつての生徒であった十四期文乙生の暉峻凌三（てるおかりようぞう）の斡旋で東京の世田谷区に元国際連盟派遣代表であった鮎澤巖の邸宅に居



ドイツ人の友の娘たち

住していた。暉峻は後に帝京大学教授として教鞭をとった。カルシューのお気に入りになった。第二次世界大戦前に国連の強化に取り組んでいた鮎澤はジュネーブの国際連盟日本代表であった。当時彼は東京を離れ疎開していたので、フリッツが鮎澤の和洋折衷の家を引き受けることになった。

家の後部にテニスマ場があった。洋式の部分は一九六八年（昭和四十三年）まで存在していた。和式部分とテニスマ場の土地は高額な相続税のために売却されたと思われる。そんなことをメヒテルトが語っていた。

外交官としてフリッツが日本に戻った一九四〇年（昭和十五年）には、今上陛下と皇后陛下とのエピソードで有名なテニスマ場のすぐ近くの別荘で最初の夏を過ごした。つぎに住んだのは、明治時代に外国人宣教師が名付けた場所である幸福の谷（Happy Valley）であり、カルシュ一家はこの地に近い、一九二四番に住んだ。旧軽井沢のはずれの万平ホテル裏手にあ

る谷で、美しいカラマツ林の木立のなかに苔むした石垣と焼き石を敷き詰めた石畳の道が続く。周囲は別荘地帯で、静かに散策を楽しむには絶好の場所であった。

カルシュの軽井沢での東郷茂徳や来栖三郎との交流についてはメヒテルトが拙著『四ツ手網の記憶』の中で証言している。東郷茂徳とドイツ人イーデスとの間に生まれた娘の東郷イセとはメヒテルトと一緒に遊んだ仲であったし、その思い出は尽きないという。当時、戦争回避を念じて野村吉三郎、来栖三郎両大使を支えていた東郷であったが、「ハル・ノー



1945年4月-1947年8月  
ドイツ帰国まで住んだ家

ト」の最後通牒から、意に反しての開戦の日を迎えることになってしまったとのことである。

この頃までは毎年夏には、軽井沢で生活していたし、日本の政府高官との付き合いもあった。やがて、戦局の悪化とともに世田谷の邸宅を去り、一九四五年四月に軽井沢一九二八番にあった古い三階立ての別荘に移動疎開した。この家は当時すでに老朽化して倒壊の危険に晒されていた。メヒテルトが父と再来日した一九六八年（昭和四十三年）には、もはやこの家は存在しなかった。

そして日本の敗戦を迎えた。この別荘から一九四七年（昭和二十二年）八月十五日にカルシュ夫妻と次女フリーデルンが帰国した。彼らはブレーメン港に到着後、収容キャンプを経てカルシュ夫妻が出会ったマールブルクに向かった。

## 心の在りか

カルシュにとつて富士山はその美しさに理屈ぬきに心から感動した対象であった。いかに美しさをカメラの構図に収められるか。そんなことにひたすら心を注いだ結果が彼の富士山の写真である。山のありようは、カルシュが信奉するシュタイナーの人智学で示唆され

る純粋な心を洗うような、そしてこどもの成長を見守るような優しい姿に写ったに違いない。生後まもなく亡くなった長男の姿がいつまでも心に掛かっていた。小石を積み上げる賽の河原の伝説を大山（だいせん）の入り口でも興味深く聞いたのである。それにもまして宍道湖畔の地藏や加賀の潜戸は日本人の母子関係に象徴される自然との関係を彼に訴えるものであった。確かに子の霊に代わって造った小石の塔が、立錐の余地なく大量に見られた。カルシュにとつては、折に触れて思い出す印象に残った日本人の死者に対する深い優しい心根である。

富士山を見ていると日本の象徴にふさわしい姿と自然との一体化を目指す自然宗教観に通じる雰囲気カルシュは深く心の内で感じた。そしてそれは宗教の中に潜む調



1927年 軽井沢に向かう途中で撮影した富士山

和のとれた美しさを投影するものであった。一度でよいからドイツの友人に、これらの美しさを満喫させてやりたい。そんなことを心の内に幾度となく思った。大山との運命的な出会い、軽井沢での生活と心のふれあい、日本各地の諸々の神社の威厳と深遠な庭園の美、ヨーロッパには見られない数々の深遠な美しさは、これまでに拙著『四ツ手網の記憶』や『朝霧の瀬』で紹介したとおりである。実際、たくさん写真を残しているのが、彼が伝えたい熱意の何よりの証拠であり、彼の純粋な心を的確に反映しているといえよう。

軽井沢での避暑はカルシュ家に多くの恵みをもたらしてくれた。山はカルシュにとつて特別の意味をもっていた。その中でも大山は日本との縁（えにし）を、佐比売山（さひめやま）は日本神話との接点を教えてくれた。そして比叡山は自分の宗教観に大きな影響を与えてくれた。加えて人的環境は人智学の行動的布教者として自然と宗教の議論の機会を数多く提供し、深遠な思考法を教示してくれた。その山々にあつて、たとえば、カルシュは大山での



1928年 7月 26日 浅間山



1929年 4月 溝口から見た大山



離山にかかる雲  
メヒテルトが父とともに40または41年の登頂



1928年7月26日 軽井沢全体にかかった朝霞

雷と稲妻を観測・撮影したことがあった。

これとは別に、浅間山では、霞を辛うじて通り抜けた朝の光を浴びながら、舟で川の瀬に歩を進める。すると自然の中の神々との緩やかな一体感が清らかな心に宿り、新鮮な気持になるのであった。

それを眼前の風景とともに懸命にカメラに収めようとする彼の行動は、さながら芸術家であった。

その他列車の窓からは富士にかかった雲、それに離山（はなれや

ま）の頂上付近にかかった輪のような珍しい雲を撮影しているが、カルシユの優れた美的感覚には驚かされる。ところで離山はテーブルマウンテンと呼ばれる平たい山で、軽井沢のどこからでも見える。山頂からの眺望は軽井沢で屈指の景観である。スワン・レイクとよばれている雲場池からは離山への登山口が開けている。このころは、まだ周囲の自然環境がよく保たれていた。

ここには父フリッツと彼の大使館赴任後に一緒に登った。山道は険しく、飲まず食わずの登

山であったことを熱心に説明してくれた。久しぶりのメヒテルトとの電話での会話である。

ドイツに一年程滞在したあと、大好きな日本に帰ってきて、父の休暇を利用した楽しい登山であった。

## 戦後

一九四〇年（昭和十五年）から七年間は日本、ドイツはもとよりカルシュ一家にとっても、混乱の時期であった。フリッツは外交官であったので、カルシュ一家はドイツ強制送還までの期間を軽井沢で暮らしていたが、インフレーションのためにすべての金銭の蓄えを事実上失い、生活は困窮した。それでも、メヒテルトの稼ぎで終戦から二年間の生活をしのいだ。メヒテルトは、国際戦争犯罪裁判（International War Crime Trials）の《ドイツ語―英語》の通訳を務めた。その後、ニューヨークシティ銀行の東京支店で働いた。

しかし、ドイツの将来に対する不安から両親との帰国を希望せず、アメリカ領事館にビザを申請した。この時期に米軍関係のアメリカ市民のホルトンから結婚の申し込みがあったからである。ビザが下りたころは両親が帰国準備中であった。当時両親はメヒテルトを単身で放置することを望まなかったので、メヒテルトに結婚を勧めたという。しかし、この結婚は失敗であった。

日本もドイツも敗れた。何もかも失つての帰国であった。軽井沢から横浜港へ、あの暑い真つ盛りに移動し、そこからアメリカの船で出発しナホトカに着いた。そして、そこからはシベリア鉄道であった。

一九三七年（昭和十二年）に生まれたフリーデルンは十歳になっていた。学校で教育を受けることもなく、まさに戦争の犠牲者であった。

一九四七年（昭和二十二年）八月十四日、カルシュが軽井沢で別れのあいさつを済ませた。

帰国前夜に知人を交えてお別れの会をささやかに催した。そのときの友人の吉田鈴江の訪問記録が残っている。メヒテルトはあらためて戦争が何もかも奪っていったことを知った。しかし、戦後は連合国のために働いたし、アメリカのためにも働いてきたことを考えると、自分の未来はアメリカにあるような気がした。ビザが下りたら、アメリカに行く決心をしていた。

カルシュは日本にきたのが間違っていたのかどうかを家族にたずねた。メヒテルトは「わたしには、松江がふるさとよ。ハイムマートよ。誰が何と言おうと、あの奥谷の官舎がわたしの家だったわ。思い出の一杯詰まった土地。何度もお城に登ったわね」そう答えながら、隣人のモニカ、エレーナのことを思った。戦時中アメリカに強制送還された日米ハーフの姉妹のことが懐かしく思い出された。

フリッツは久しぶりに夢をみた。あの大山の姿であった。夏に過ぎた大山であった。そして生徒の顔が浮かんで消えた。遠い昔の出来事が夢のなかに現れては消えた。

目覚めて、二人の子供も授かって、いま故国に帰る幸せを確信し、それを自分に強く言い聞かせた。松江は戦災に遭わずに済んだらうか、エンメラが傍らで、心配そうにつぶやいた。

カルシュ夫妻とフリーデルンはブレーメンに向かった。フリッツには自分の過去の学歴、経歴に見合うような十分な活動の機会をドイツで与えられることはなかった。帰国時の年齢が五十四歳で、フォード財団の援助による成人学校での講師は最低限の生活の保証でしかなかった。

しかし、一家は帰国しても、ソ連の影響下に置かれたドレスデンを最終的な居住先として

は選ぼうとしなかった。彼らは、エンメラとの思い出の地、そして自分の生涯を決定した長屋喜一との運命の出会いの地であり、自分の学問を育んだハルトマンとの出会いの地でもあったマールブルクを選んだ。ここでは、カルシュ夫妻が戦前から信奉していた自由ヴァルドルフ学校の復興も予定されている。シュタイナーの思想を基にした、戦時中には禁止されていた学校を見ることが出来る。

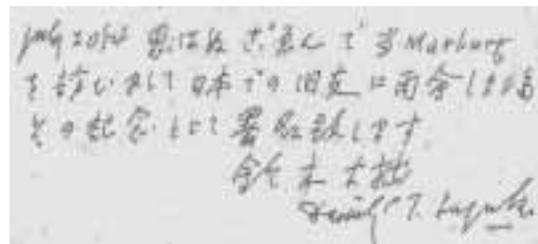
ブレームンに着いた。ハンザ同盟の伝統を今に引き継ぐ千二百年の歴史をもつ古都である。



強制帰国後のカルシュー家の住居

十九世紀はじめに整備された港湾に船が着いた。長い旅であった。屈曲した堀とヴェーゼル川に挟まれたその辺りが市街地である。広場には剣と楯をもつ街の守護神の中世の騎士ローラン像が立っている。聖ペトリ大寺院が十五世紀のゴシック様式の市庁舎の隣にそびえている。その西門にはグリム童話の《ブレームンの音楽隊》の像が立っている。

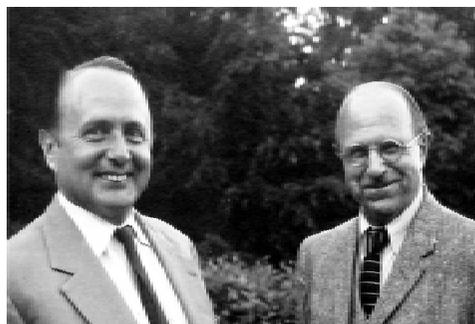
フリーデルンが一番下のロバの足



1954年7月10日訪問記に残る鈴木大拙の足跡



フリーデルン・エンメラ・フリッツ  
マールブルクの自宅にて



親友ハイラー博士とともに

に触れて、つめたいことを確かめ、四頭の動物を順に眺めて、ひとり無邪気によるこんでいた。

かつては煉瓦造りの美しい建物で満ちていたこの地は引揚者で溢れていた。いわば難民キャンプだ。もはやかつてのドイツ人の誇りはなかった。ドイツ人の身着のままの惨めな生活であった。しばらくは、ここで暮らすことに

なった。

やがて、連合軍の指示とフリッツらの希望に沿って、カルシュ家の一行はこの古都を離れ、ドイツ四大学街のひとつのマールブルクに向かった。戦災にあって荒廃した街並みではあった。が、もともとドイツメルヘンのゆりかごとよばれるほどの美しい街である。

小高い丘にはお城が聳え、遠くからの眺めはしばし時の流れを忘れさせてくれる。そんな落ち着きのある街である。

フリーデルンに、ここが自分達が出会った街がきれいなグリム童話のふるさとであること、それにこのヘッセン州は昔話や伝説の豊富な民話のふるさとであることを話した。

彼らは戦災を免れたアパートに入居した。アメリカのフォード財団の援助により戦争で中断された若者の教育が始まっていた。その教育にフリッツが携わることがすでに決まっていた。最初は生活に困窮していたが、成人教育に携わりながら家族の生活を維持していた。

ヘッセン州内では、フリッツは日本やアジアに関する講演からの収入を生計の補助としていた。その内容は戦前の日本の生活、習慣、文化を眼前に彷彿させるもので、実の名講義であったという。

こうしたなか、宗教哲学者の鈴木大拙がマールブルク在住のカルシュ夫妻を訪ね、旧交を温めたことを示す一九五四年（昭和二十九年）七月二十日付けの訪問記録がGästebuchに残っている。また、ハイラー博士との交流を通じて、宗教学者としての三笠宮崇仁殿下との交流も行っている。

ここで、フリーデルンは成長した。フリーデルンの学業は自由ヴァルドルフ学校で行い、さらにマールブルク大学に進学した。当時、彼女は、学生寮にも入る費用すら用意できない



フリーデルン・エンメラ・フリッツ  
マールブルクにて

ほど困窮していたが、大学のいわば奨学制度の恩恵により勉学を続け、卒業した。そして、さらに学位取得までの過程もすべて、当時の担当教授の計らいで支えられたと彼女自身が著者に語ってくれた。

写真は帰国後の二度目の家である。この家は先の住居に比べて、住み心地が良かったとのことである。

一九六一年（昭和三十六年）には、フリッツは病気のため年金生活に入った。彼は、それ

からしばらくして、古巣のキリスト教共同体に属するカッセルの養老院のアルベルト・コルベ・ハイムに移住し、ライフワークである人智学の研究に専念しようとした。

この時期には、フリッツは折にふれて日本に関する講演をし



1960-67年までの住居 マールブルク



カッセルのアルベルト・コルベ・ハイム  
1967年 創設の老人ホーム  
矢印はカルシュ夫妻の部屋

ている。その一部がテープに残されている。また、この間は頻繁に教え子が訪ねてきた記録がある。赤十字病院の前の石畳を過ぎると突き当たりにこの老人ホームがある。当時としては珍しい、完全介護の施設で、日本では最近になってやっとこのような住居が建てられるようになった。夫婦が独立に部屋を確保し、共通の居間をもつ。我々の感覚から言うと贅沢な住まいであった。ドイツのこのような先見性は驚くべきことである。残念ながら、訪問の際、中を見せては貰えなかったし、住んでいた証拠を見せて貰うだけでもその交渉に手こずった。

## 再会

ここでは、一九六八年（昭和四十三年）の旧制松江高校同窓会の招待によるカルシュ父娘の再来日の様子について述べることにする。その前に、カルシュの調査のなかで知ったカルシュの薫陶を受けた著名な生徒たちを挙げてみたい。まず、政界では衆議院議員で、自治相を務めた赤澤正道（四期文乙）、元島根県知事伊達慎一郎（六期文乙）、元衆議院議員の楢橋勇（六期文乙）、衆議院議員・国務大臣十回・衆議院議長を歴任した福永健司（七期文甲）、元衆議院議員の高田富之（九期文乙）、衆議院議員で自民党総務会長・行政管理・防衛庁長官・運輸大臣を歴任した細田吉蔵（九期文甲）や元衆議院議員・労働大臣の山手満男（十一期文乙）などがあげられる。

赤澤はカルシュの歓迎会にカルシュあてにドイツ語で書いたメモを残している。高田は学園闘争で退学処分を受けて、地下に潜伏した。その後東北帝大に入学して、卒業後は日本共産党員として、さらに日本社会党員として福永や細田らとは異なる信条と国会活動を通じて国政に寄与した。



1968年10月終生の友人 長屋喜一との再会

阪大教授・微生物病研究所長で麻疹ウイルス分離、マラリアなどの研究により紫綬褒章を受章し、日本のジェンナーと呼ばれた奥野良臣（十四期理乙）らの活躍がある。彼との数度にわたる直接の交流は前述のとおりである。他には、永井隆の亡き長男の夫人とは電話で対話したことがある。酒井勝郎とは自宅で面会した。興雲閣での展示会のお陰で古田紹欽の孫弟子との書簡による交流があった。さらに、芸術界・出版界では、舞踏家でドイツ留学後に欧米の舞台で活躍し、カリフォルニア州立フランクソン大の教授を務めた邦正美（韓国名が朴永仁で八期文甲）、岸田国土の劇作同人、大映グランプリ『羅生門』のプロデューサー・放送作家一（九期文乙）、『暮しの手帖』社設立、編集長を務めた花森安治（十期文乙）などがある。辻久一については友人としての白石（九期文乙）の肉声が残してある。



1968年10月NHKラジオインタビュー  
松原の顔が見える



1968年10月同窓会の後で 右端は増田義哉



1968年10月 大阪にて  
松原とともに



1968年10月島根大学にて

元北海道  
大印度哲  
学教授、  
僧侶で鈴  
木大拙の  
後継者の  
古田紹欽  
（十期文  
乙）、元大

著者は、細田とは東京・青山で数回個人的に接し、松江高校同窓会の毎月第二木曜日に行う「二本木（耳目会）」でも、他の同窓生とともに語り合う機会を得た。外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚（九期理甲）、海外移住事業団理事・ウルグアイ大使歴任の大城斉敏（十期文甲）がいる。宇山厚とは日本銀行近くの東洋経済事務所で開かれた「耳目会」で面会し、懇談したことがある。法曹界では大阪弁護士会会長・日弁連会長を務めた和島岩吉（五期文乙）、元広島高裁長官の松本冬樹（八期文甲）と同じく元広島高裁長官矢崎憲正（十期文乙）、元福岡高裁長官綿引紳郎（十五期文乙）らが挙げられる。和島岩吉の息子からは父の顕彰の感謝の書簡を手にしただけでなく電話で語りあったことがある。学界では元長崎医科大学放射線医学教授永井隆（五期理乙）、元島根大教授・元琉球大教授の酒井勝郎（五期理乙）、元滋賀大文学教授で雑俳史研究家の宮田正信（九期文乙）、



プレゼントを手にするカルシュ父子

つていたことを諸処で耳にしている。

松江高等学校同窓会のカルシュ父娘の日本招待は、もとはと言えば、増田や加納の発案から寄付を募り、大がかりな催し物として実現した。一九六八年(昭和四十三年)十月のNHK松江放送局によるインタビューでは「外国ではこんなことは、けっしてありませんよ」とメヒテルトは自分が外国人であることを忘れ、あたかも自分が日本人であるような立場から質問に応じていた。一期理乙生で母校の松江高等学校元教授であった松原武夫と日本の母の織錦君枝も

インタビュに応じた。メヒテルトが当時のエンメラにそっくりだと君枝がもらしていた。このとき、メヒテルトの夫君のヘルベルトの日本訪問の感想の声も残っている。インタビューはメヒテルトの通訳で行われた。当時日本語を教えた家庭教師の中村(石飛)フデ子がメヒテルトの昔話をしてくれた。あまり覚えのいい子どもではなかったとのことである。カルシュ父娘は、十月十七日からは三日間、酒井勝郎宅に宿泊し、旅の疲れを癒した。東京滞在中は、遠い昔に親しく交わっていた十四期文乙生の暉峻凌三(てるおかりょうぞう)の病気を見舞った。メヒテルトは、久し振りにウッドマン家に編み物の上手な母と住んでいた赤川姉妹との再会できた。それに前述のように東(小豆沢)史とも再会を果たした。カルシュ一行は各地でいろいろと行事をこなしながら、かつての友人、同僚とも再会して、旧交を温め

ることに終始できた。写真は、同窓会から贈られた羽子板と家財道具まで揃っている二階建て民家の精巧なミニチュアで、アメリカの自宅でメヒテルトがこれを眺めて日本の生活を懐かしんでいたのを記憶している。

## 失われた気概

旧制高校は実質的には大学の準備機関であるが、すぐれた教育を目指したために優良教師の確保や行事遂行に費用がかかり過ぎることもあったようだ。しかし、その特色として、在学者には現在からは考えられないような、大卒の試験で大学進学が容認された。それゆえ、在学中の三年間を自由に過ごせしめ、その中で若者同士の語らい、精神的成長やその気概の競争があった。



生徒の質問に丁寧に答えるカルシュ

ところで、そこで行われた教師との触れ合いの教育と自らの活動が今もお語られるのは、受験からの実質的解放と、取りも直さず、全人教育の成果を振り返ることができるからであろう。そして、その背後に将来を担うエリートとしての暗黙の保証があったことが、余裕のある勉学を促し、人間関係のおおらかな認識を育てたといえよう。

これらの環境条件は、人生の揺籃期にあつて、目標を将来の彼方においていた人生設計とそのため的大局的競争のための思想と行動を養う時間と空間をも保証してきた。今日にあつて、狭い専門性を掲げて大学受験し、特定の技のみに終始した人々の人生の姿と内容を見れ

ば、どうしても全体的に貧弱かつ脆弱の印象が強いし、思想や人格、また困難時の体力、知力、精神力についても同様なことが観察されるものである。そして人生が自らの小さな内的環境の枠内に留まることになりがちであるからである。

カルシュの広めようとしたシュタイナーの理念を思い巡らしながらそう感じたものである。

英才教育を悪とみなし、安易な平等を標榜した戦後の初等教育は横並びにならなければ、安心できないという、そしてそれとは対照的に、少しでも差をつけようとする深層心理は、無用で低次元の争いを新たに生む弊害をもたらした。かつての日本の英才教育には、良きにつけ悪しきにつけ、国家を思惟（おも）う気概の伝統を受け継ぎ、実力に裏付けられ、誇りに包まれ、そして将来の自らの責任ある役割や地位を夢見る若者の姿があった。英才教育は海外諸国では厳然として存在しているし、多くの人々がその社会的必要性を認めるところである。今日も形式的には一応そうした精鋭に政治家や高級官僚といった者が世間的には当てはまるが、その実態は異なるものと思えてならない。もちろんすべてがそうであるといっているのではない。

ところで、人生の経験が未だ乏しい若者にとっては、何らかの意味で他とは異なる優れた点をだれかに認められ、自分が特別視される願望があることを多くの人が思い出として語ることがある。これは、若者の心の表現であり、時には一人前の人格扱いの願望にパフォーマンズが加わる。したがって、向上心に富む者には成果に結びつく誘導と成功の誉れを与え、心理的充足感を与えることが重要である。その理由は個としての自己の存在が認識されず、

逆に没個性を強いられることへの不満は経験浅い若者では、時に暴発や邪道にそれることがよく見られるからである。このあたりも、どうやら今日の教育の中でより深く考察すべき事項であろうか。

本質的に若者に内在し沸き上がる人間性が、旧制高校に備えられていたと思われる自由な環境と全人教育のなかで発揮し易かったことは、カルシュと生徒の間で繰り広げられたエピソードを見て容易に想像できる当時の教育の特筆すべき根本であり、今にして最も強く求められている論点である。となれば、旧制高校の存在意義はもつと評価されてしかるべく、したがってその建学の精神の実現のための教育方法の見直しと再展開の価値を見出せるはずである。もちろん、単純な学制の復活は今日にあつては不可能であろうが、旧制高校を弊害としてのみの見方については、これを捨て、再評価と再活用に向けての新しい展望を求めらるべきであろう。カルシュと生徒とのかつてのやりとりを語る、老いた生徒の言葉と今も変わらぬ気概を聞いてそんなことを考えてみた。

## カルシュの残したもの

自由の雰囲気定着したかに見えた大正末期から昭和初期にかけてのことである。日本は経済状況の悪化の過程で、徐々にその社会の枠組が変遷しつつあった。その頃がカルシュの日本で活躍した時代である。カルシュにとって仮の栖（すみか）であったはずの日本に、思いがけず長期間滞在することになり、人々と交わるなかで、彼の心の内が少しずつ変化して

いった。カルシュが日本に来てみると、彼の求めていた精神的な抛り所が、自分の住居のあった松江や山陰地方だけでなく、日本の各地に息づいているのを見た。そこには必ずといってよいほど、人の生活の本質的欲求である、近隣が寄り添ってつくる小さな共同体の輪が存在し、人々は相互依存の形の中で暮らしていた。

ヨーロッパの合理主義、能率主義から離れた心の余裕、行動のゆとり、遊び心や日本の伝統文化から醸し出される安らぎと人々の生活感を松江での現実の生活のなかに見出したのである。豊富な自然の様相と身の周りの現象の背後に潜む、優しさとしなやかさがカルシュの心を捉えた。

時には畏れをも抱かせ、微笑みかけ、暖かい息吹を人々の生活の中に与えてくれるのが神々である。そうした日本



カルシュの哲学者としての未発表研究成果  
(1万5千ページの遺稿)現在メヒテルトが保存

人が神々と呼ぶ大きな力と愛に満ちあふれた存在を、彼は自分が訪れた至る所でおそらく強く感じ取ったことであろう。

ヨーロッパの一神教的な発想の窮屈さに比べて、日本の神々は人の能力を超越した絶対的存在でありながら、日常に密着した極めて身近な人間性が投影された姿で、空想と現実が入り混じった世界を自由自在に動き回っている。そんなものを感じたのであろう。

それがカルシュの見た日本の姿であり、西洋の文明というやや制度的側面から構築された常識から見て、発展が遅れているとみなしていた日本社会が実は美意識と活力に溢れる愛すべき世界であった。そこには、果敢に取り入れた西洋文明のなかに、古き洗練された固有の文化が調和のとれた形で存在していた。

そんな人工の響きとは異なる社会の鼓動にカルシュは耳をそばだてながら、宗教心が篤く美しさを求めて生きる礼儀正しい人々に数多く接したのであろう。そしてそこから、人の生活の本質を見出し、西洋とは全く違った独特のバランスのとれた穏やかな雰囲気の日本の寛容さの中に自分の求めていた世界を見たのであろう。

他人に対する寛容性を欠いた発想と厳密性を主張することによる文明の優越性を主張する西洋の姿を自負し、それを世界に拡大することこそが自らの役目と思っていた西洋の人々の生き方は、この地の人々にあっては根本的に様子が違っていた。そうした違いをカルシュは日本での生活を通して、徐々に体得していった。このことは、彼が第一次世界大戦で従軍を経験し、心が傷つき、互いの争いに心の痛みを感じながら、工学に替わって宗教や哲学に心を寄せ、自らの学問の意義を懸命に模索し続けてきたことと無縁ではない。カルシュが瞑想

したり、散歩したり、絵を描く日常の姿がそれであり、それが眼に見えるようである。したがって、新形而上学と呼ばれた学問の担い手で恩師でもあったニコライ・ハルトマンの元を離れて、ルドルフ・シュタイナーが展開した一連の体系である人智学に徐々に傾斜していったのはむしろ当然の成り行きであった。

こうした思想の流れは、当時、二元論的世界観を斥け、心理主義的な思想が流行していたことと決して無縁ではないし、カルシュが後に日本で仏教や禅に大きな関心をもつようになったのも容易に納得できることである。

言い換えれば、人の生涯全体を実践の連鎖ととらえ、同時に、心や本性の細部に配慮したものである思考を基礎とする人智学にカルシュが傾いていったのも、弱者が苦痛を味わわないような心の支えがあって正しく生きられるという、人間的な社会の実現を彼が志していたからである。

そうした背景をもつ日本の中の共同体とその源流たる日本の伝統文化におそらく限りない安らぎをみたのであろう。そのような感性をもつカルシュの純粹な思考と実践が当時の高校生の子ぎざまに与えた影響には、どうやら現在の教育に欠けている事柄が何であるかについて少なからず示唆がある。とくに、カルシュの行った授業で生徒とのやりとりのなかには、異質の文化に積極的に触れようとする進取の機に富んだ生徒の学習経過に自分が信奉する人智学の説く人間形成の関与を実践的に組み入れようとの努力が窺える。つまり、生徒の将来をいつも見据えて、周囲や世界を大きく見ようとしている気概と高い自らの成功志向の生徒の成長をカルシュが暖かく見守っていたことである。



生徒に贈ったカルシュ博士自身の毛筆によるニーチェの言葉  
松江在住の前田俊明氏所蔵

生徒の心の中で、なお細部にわたって思い出せると当時の生徒であった亡き宮田正信滋賀大名譽教授が語っていた。そのような講義はカルシュだけに限るものではなく、すべての教師によって行われていたという。生徒にとつては、この時期は人生の成長期の大切な一コマであり、先生、先輩、級友の関係は格別であった。また、松江の人々の純朴な親しみを肌感

じながら、そしてロマンスを夢見ながら過ごした時期であった。それゆえ、この時の諸々の経験は心の宝物であつて、大人になつてからの行動原理の源であつたというほどである。ところで、フリッツは、毛筆を好み、実際に写真にあるようにニーチェの言葉をアルファベツトで自筆で色紙に残している。

現在、前田俊明の所有になるものである。当時小学生的の彼の両親が松江高校生を相手に下宿屋を営んでいた。

色紙は生徒へ贈る言葉を念頭に置いて地元松江の俳人で父の前田貞明に託したものである。一九三六年（昭和十一年）三月四日付けの書である。

『湖畔の夕映え』で一部語つたことであるが、

生徒から本当に慕われていた教師が、大学とは異なる当時の高校の役割を考え、教育は勿論のこと、日常的な交流を通して、実践的人間形成を体現していたのである。固定した形式にとらわれない、そうした教師とその象徴でもあつたカルシュが教育に参画し、しかもそれを支える伝統文化が松江高校の周辺に多く存在していたことに大きな意味があつた。繰り返しになるが、カルシュが物質文明を謳歌する世の動きに従つて、最初は当時の流行であつた電気通信工学の知識を生かすために志願兵として大戦に参加したことがある。そこで、本質的な人間の生き方を考えた末に彼が宗教と哲学に傾倒し、やがてシュタイナーに興味に移り、日本に来てからは日本人の鷹揚なもの捉え方に関心をもつようになったのは偶然ではない。カルシュにとつて、なぜ比叡山での瞑想であつたのであろうか、なぜ古代世界なのか、仮象の世界なのか。大きく心が引かれたのは、おそらくそれらが脈々と息づく出雲地方や訪れた各地に心に安らぎをもつてその実像を見出すことができたからであらう。またそこに入つて行く中で、宗教心に密着した、自然の美しさと生活様式の美しさが自分の心に映つたからであらう。

彼は折に触れて、日本の類い希な自然の美しさを語っている。その結果として、多くの風景画や想像画を残しているし、自分が接した生徒に自分の美意識とその思いも伝えていった。

話は変わるが、旧制高校に関してカルシュにとつても松江にとつても、周辺に居た人々の想いが生徒を通して、これほど正確に多く語られているのは注目に値する。例えば、シュペンクラー、ニーチェ、マルクスなど著名な哲学者についてカルシュが語つた講義の内容は、

当時、前田宅には十三期理乙の石倉愷が下宿していた。そのときの縁で前田宅を訪ねカルシユが貞明と親しくなったと思われる。彼の子息の俊明は他県の工業専門学校に通っていたのでカルシユの生徒ではなかった。

カルシユ博士の選んだニーチエの言葉については、著者自身の翻訳を添える。

「汝の心から《英雄の気》を失うことなかれ

《気高き大望》を汝の胸に抱き続けよ」

こうした言葉を常に耳にしていた代表的な人物は十四期理乙生の奥野良臣であった。微生物病学に大きな業績を残した彼は学術情報としてドイツ語の論文が重要な先端的役割を果たしていた時代を振り返る。とにかく、学校教育全体が生徒を自然な形で専門の途に誘導していったし、それが画一的でなく個性の重視にあった。そんな中で、思い切ったエネルギーの燃焼の仕方と人の優しさと思いやりを授けてくれたのがカルシユであったという。



街中を散策する晩年のカルシユ夫妻

## 雑感

著者は、カルシユ博士の存在を偶然に知り、僅かな手掛かりを辿って事実を発掘した。そして、彼の足跡を検証する中で、改めて彼の偉大さを知った。時に、奇しくも、著者の関係するドイツ学術交流会 (DAAD) が創設され、ドイツが世界と本格的な学術交流を始めた一九二五年（大正十四年）はカルシユ博士が来日した年でもある。二〇一一年《平成二十三年》は日本では周知のように『日独修好一五〇年』にあたり、特に日本との関係を重視した催し物が各地で行われた。日本をこよなく愛し、多くの人材を育成したカルシユ博士は戦中・戦後の混乱時に埋もれ、殆どの日本人がその存在すら知らない状況にある。このように時期が熟している今こそ、カルシユを正しく知ってもらう好機であると思っている。

彼は直接に接したことのある人以外には、残念ながら名の知られていない哲学者である。その理由は戦中戦後の混乱によるところが大きい。とにかく評価の機会がなかったからである。したがって、いま博士の隠れた功績を発掘してまとめ、同時に彼の縁者の生の声などを統一的に記録して置かなければ、遠からずして、すべてが我々の記憶から消滅する運命にある。

最初に著者の手元にあったのはカルシユの次女のフリーデルンが記した彼女の住所だけであった。そこから、芋蔓式に色々な事実を眼前に手繰り寄せた。その事実の間に絡まる縁（え

にし)の不思議さに驚きとロマンを感じ、今更のごとく感慨に耽るものである。そして、調査のさなか旧制松江高校から輩出した多くの人材を知るに及んで、異質の文化に濃厚に接することが若者の成長に如何に重要であるかを痛感した。とくに、戦後の社会再建に貢献した旧制高校卒業生の姿と言動から、そして若き日の行動から、人の心に余裕とエネルギーを生み出すものが何かがどうやら概観できる。

とにかく、当時の教育に見えることは、周囲との密な接触、未熟者同士の接触と相互の刺激と自由な議論の姿であり、このなかでの己の価値観の発芽がやがて開花したことである。もちろん己の意志で己の道を見いだすことは、容易ではなかったであろうが、悩みながらもやがて見出すべくその下地を当時の教育環境に見ることが出来る。一旦心に確信した価値観を具現すべく方法を自ら探求する努力を苦労はあっても自然な形で行ってきたようだ。生徒達の手記を熟読するなかにも、先生と生徒の双方が作用しあつて、ともに精神の高揚をみたことが容易に推測されるからである。

高校時代は自由の意味を知り、友情の価値を悟り、大人の世界に少しずつ足を踏み入れて、希望に燃えた時期であつたという。独特の自由の気風を背景に、天下国家を論じ、大学進学を優先的に認められ、大らかなエリート意識と深い友情の鎖が脈々と維持されてきたという。高校での自由の精神と三年間に生まれた友情の絆は、生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなつて連綿として繋がってきた。そんな松江の三春は青春そのものであり、教室で、校庭でそして町中で、何ものにも換え難い美しい交わりと貴い自由を感じたものであつた。

今は亡き旧生徒たちが著者にそんな感慨を漏らしていた。

当時内外の社会には不況が拡がり、左右の争いが激化し、革命思想が頭を擡げ、治安維持法強化による事件が続出するような暗い世情に傾きつつあつたが、成長期の彼らは自我の認識を強め、大人への精神的脱皮に進んだ貴重な時期でもあつた。そして戦争を体験した後、昭和後期の経済繁栄とそれを支えたのが当時の教育環境であり、そこでさらに育つたのが彼らであつた。そう語る人々が、そのときの教育の象徴としてか、カルシュの話題に自然にのめり込むのを著者が繰り返し目撃した。

現在、著者は日本人研究者による《カルシュの研究》の呼びかけを行うだけでなく、関連資料の永久保存を関係者に提言している。具体的にはカルシュの永久記念のために本格的記念館を創設したいと継続的に思っていた。というのもカルシュの残した書籍、膨大な研究成果や絵画、写真、家具調度をそこに納めることを願っていたからである。そして、著者がこれまで収集した資料と併せて、カルシュの顕彰を願って刊行物に纏め上げて世の中に供することを考えてきたからである。

本調査の初期に資料の提供や旧生徒との橋渡しを献身的に務めてくれたのが、旧制松江高校九期生で当時のクラス総代であつた白石磷である。

『昭和初期の高校教育が我々の生活にどう関わってきたのか』について、同じ道を歩んだ同期生とともに、この言葉を著者だけでなく後世の人々にも伝え、問いかけたいと胸を張って語っていた。

あとがき

カルシュが不思議な縁から著者の周辺に突然現れた。彼の辿った道筋を順に追跡するなかで、多くの未知の事柄を追体験することになった。彼の残した当時の写真は奥行き解釈が困難なものではあったが、徐々に人々の生き生きとした活動を彷彿する、いわば立体的な原風景が色彩をともなう著者の眼前に蘇ってくるものであった。

カルシュの教育観には、現在の大学には存在しない心の交流と心理的ゆとりに根ざす大きな広がりがあった。そして、学生にはそれを元に考え、将来を見据えた大きなエネルギーを自ら蓄えて、目標に迫ろうとする心意気があった。

ところで、カルシュの見た日本の生活は自然との調和の美に根差すものであり、ヨーロッパの整然とした幾何学的人工の美を基礎とするものとは根本的に異なるものであった。そのなかで、生活と自然との関係は、時には対立的でありながらも相互に優しく包み込むものがあり、そこに人々の生業と神々との連携の独特の美意識が感じられるものであった。それが常に、日本の生徒の生活や学習・教育に反映していた。

著者は、自然科学の徒として一応学者の末端に連なる浅学非才の身であり、論文や解説以外の著述には殆ど経験がなかった。従って、いわゆる文化的記述や関連著書も手持ちにはなかった。それゆえに、まとまった本としての出版には専門書の出版と異なり辛酸を少なからず味わった。その中であって、この十年余の短期間に限って、写真を始め多くの資料を手にするようになったことが、逆にその存在価値を広く訴える困難を呼ぶことになった。昔を語

る数十枚の写真の発見と所有なら、それ自体が人から容易に信用され、価値も評価されるが、二千枚を超え、加えて旧生徒からも提供を得たこともあって、合計すると常識外れの枚数の写真を所有したことへの疑念を指摘される結果になった。そんなわけで写真を用いた調査の協力がなかなか得られず、展示会なども殆ど開けず、結局殆どすべての作業を独力で行わざるを得なかった。もちろん、少ないながらも理解者が得られたことや一部の報道関係者の厚意は、何にも替え難い大きな心の支えであったし、今にして改めて感謝したい気持ちで一杯である。

そのなかで、残念なことは、カルシュが関連する文化事業の支援や協力願いを働きかけても殆どが無視されたことである。一方、どこで話しても、地元が重視しないのは価値がないからであるとの言葉もあって、真に後世に残すべき記録として経済的にも思うに任せなかった思い出と記録できずに終わってしまった無念さが多々ある。

著者は、医用理工学の教育研究を大学で担当している現職のなかであって、カルシュに関する調査は国内に限っても週末を利用することによってのみ行うのが背一杯であったので、その調査の不十分さのそしりは免れない。ここでは知り得たことを忠実に記録としてとどめたが、なおも資料の備わったカルシュの軽井沢での生活および大使館時代の生活、さらにドイツでの生活については勿論のこと、未調査のカルシュの行った事項を後世に残すための出版の必要性を考えている。したがって、こうした価値ある膨大な資料を基にした歴史的事実や思想を消滅させることなく、多くの人々の連携のもとにまとめることが、これを機会に可能になれば、著者にとっては望外の幸せと感じている。

今般、カルシュの思想を含めた周囲との関わり合いを人々の理解の中で、その意義を考慮してくださったった当該出版社とその関係者に心より感謝を表するものである。

末尾ながら、文中関係者の敬称をすべて省略させていただいた非礼にお詫び申し上げますとともに教育・研究者としてのカルシュの業績の顕彰と同氏の見た日本各地の大正末期から昭和初期当時の様子について、膨大な数の写真のなかから選んだ貴重な資料の紹介のために、逐一、助言を賜ったカルシュ博士の長女メヒテルト・セイントゴア氏（米国）と次女フリーデルン・カルシュ氏（ドイツ）の支援に心より御礼を申し上げます。

平成二十三年十一月十五日

## 記録と報道

### カルシュ顕彰に関する報道記事

- 一 東京新聞 夕刊 三品信 「心のファイル」忘れられた日本の恩師 「ドイツ人哲学者」(二〇〇〇年十月四日)
- 二 日本経済新聞 文化欄 「遠来の師今なお追慕」(二〇〇〇年十二月二十日)
- 三 産経新聞 関東版 文化欄 「独人哲学者、フリッツ・カルシュ氏 日本を愛し、偉大な足跡を残す」(二〇〇一年一月十三日)
- 四 産経新聞 関西版 文化欄 「第二の故郷、日本を愛して、あるドイツ人哲学者のこと」(二〇〇一年一月十八日)
- 五 読売新聞 島根版 「カルシュ博士のこと 知って」、旧制松江高で十四年間教壇(二〇〇一年三月二日)
- 六 山陰中央新報 「カルシュ博士の情報提供を」第二のハーン顕彰へ 東京の大学教授呼び掛け(二〇〇一年四月六日)
- 七 読売新聞 島根版 「カルシュ博士と学生の交流小説に」、旧制松江高で十四年間教壇へ、松江での功績知って、東京医科歯科大・若松教授が出版(二〇〇二年七月十八日)
- 八 山陰中央新報 「明窓」岡部康幸(二〇〇二年七月二十八日)
- 九 山陰中央新報 江角比出郎 文化 「残した足跡明らかに 若松秀俊著
- 十 『湖畔の夕映えーカルシュ博士と松江ー』を読む(二〇〇二年七月三十一日)
- 十一 東京新聞 著者に聞く「偶然の出会いで調査にのめり込む」(二〇〇二年八月四日)
- 十二 山陰中央新報 「松江での足跡たどり偉大な業績に再び光り」(二〇〇二年八月十六日)
- 十三 山陰中央新報 石川明 「日独文化交流とカルシュ博士」(二〇〇二年十二月十一日)
- 十四 山陰中央新報 カルシュ十四年の足跡 人柄しのぶ展示会(二〇〇四年四月二日)
- 十五 日経新聞 文化欄 ラフカディオ・ハーン没後百年(二〇〇四年七月三十日)
- 十六 読売新聞連載「島根の記憶」十五回連載(二〇〇四年七月十五日―二〇〇四年十二月九日)
- 十六 松江郷土資料館 企画展示「松江を訪れた外国人たち」(二〇〇五年四月一日―二〇〇五年八月三十一日)

- 十七 朝日新聞 島根版 金井信義「もう一人のハーン」名はカルシュ 旧制松江高で独語教え、欧州の窓口  
「功績」外国人宿舍保存と共に 東京の大学院教授訴え（二〇〇六年三月二十四日）
- 十八 山陰中央新報「第二のハーン」カルシュ博士の宿舍、取り壊し案が浮上（二〇〇六年四月十一日）
- 十九 朝日新聞 島根版 旧松江校外国人宿舍、保存へ 大正期の折衷様式「貴重」（二〇〇六年十月二十日）
- 二十 日本海新聞 島大旧奥谷宿舍と島大正門有形文化財に登録（二〇〇六年十二月九日）
- 二十一 毎日新聞 文化審答申 島根大の旧奥谷宿舍と正門、国の登録有形文化財に 二〇〇六年十二月九日
- 二十二 山陰中央新報 島大の旧奥谷宿舍国の登録文化財に 二〇〇六年十二月九日
- 二十三 朝日新聞 カルシュ博士を知っていますか 東京の大学院教授が相次ぎ出版 二〇〇七年十一月七日
- 二十四 山陰中央新報 奥谷宿舍「ミュージアム」に 二〇〇九年十月二十二日
- 二十五 島根日々新聞 島根大学旧奥谷宿舍がリニューアル 二〇〇九年十月二十二日
- 二十六 毎日新聞 島根大学旧奥谷宿舍 修復が完了御園生枝里 二〇〇九年十月二十二日
- 二十七 朝日新聞 島根大「旧奥谷宿舍」当時の姿に改修完了 地域の交流拠点へ 大野正智 二〇〇九年十月二十二日
- 二十八 朝日新聞 伝統の洋館交流の場へ 二〇〇九年十月二十二日
- 二十九 読売新聞 「旧奥谷宿舍」建築当時の姿に 二〇〇九年十月二十二日

## 講演会

- 一 彩の国にいきがい大学伊奈学園 若松秀俊 公開講座  
「人間発見」日本教育の礎を形成したドイツ人カルシュ 博士」（二〇〇六年十月二十五日）
- 二 島根大学 ミュージアム学公開講座 若松秀俊  
「日本教育の礎となったカルシュ 博士」（二〇〇七年一月十二日）
- 三 島根大学 ミュージアム学公開講座 若松秀俊  
「メヒテルトさんの語る外国人宿舍と松江の日々」（二〇〇七年九月二十六日）
- 四 島根大学 ミュージアム学公開講座 若松秀俊  
「松江の宝・島根大学旧奥谷宿舍への想い」カルシュの足跡と残した偉業」（二〇〇九年十月二十日）
- 五 福徳産業 戦前の高等教育に尽くした知られざるドイツ人 若松秀俊（二〇一〇年十一月八日）

## テレビ放送展示会

- 一 NHK松江放送局フレッシュユガイドインタビュー（二〇〇四年四月二日）
- 二 NHK松江放送局しまねっと（二〇〇六年九月八日、十一日）
- 三 山陰ケーブルビジョン さんいん TODAY「伝えたい、故郷の魅力」（二〇〇七年三月）
- 四 NHK松江放送局 しまねっとインタビュー 二〇〇八年二月十五日

## 展示会

- 一 フリッツ・カルシュ展 NHK松江放送局一階ロビー（二〇〇四年四月二日―四月十八日）
- 二 松江郷土館（興雲閣）企画展示「松江を訪れた外国人たち」の様子（二〇〇五年四月一日―同年八月三十一日）

## 新聞連載

- 一 若松秀俊 山陰中央新報 旧制松江高等学校教師 カルシュの足跡を追って、 二〇〇三年五月十三日より二〇〇三年十二月三十日まで三十二回連載
- 二 若松秀俊 読売新聞 島根県版 「島根の記憶」十五回連載平成二〇〇四年七月十五日より二〇〇四年十二月九日
- 三 若松秀俊 朝日新聞 ドイツ人哲学者が見た島根・日本 二〇〇八年六月十一日より二〇〇九年三月二十五日まで三十五回連載

## インターネット新聞【取材ニュース】教育 文化 歴史

- 一 歴史の狭間に埋もれた教育界の偉人・カルシュ博士 JANJANBLOG 二〇一〇年五月十五日
- 二 ドイツ人哲学者カルシュ博士の残したものを JANJANBLOG 二〇一〇年五月十八日
- 三 失われた気概を旧制高校の教育に見る JANJANBLOG 二〇一〇年五月二十二日
- 四 カルシュの教育の原点を探る JANJANBLOG 連載一―十八回二〇一〇年六月十六日―八月二十三日
- 五 カルシュの見た出雲地方 JANJANBLOG 連載一―十九回 二〇一〇年六月二十五日―八月十二日

## 著作・出版物

- 一 若松秀俊「忘れられた異人さん」多くの若者を育んだフリッツ・カルシユ  
松江での日々と日本への想い(私家版) (二〇〇〇年十二月)
- 二 若松秀俊「想い出の中の旧制高校」私達はカルシユ先生の生徒でした(私家版) (二〇〇一年一月)
- 三 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」カルシユ一家が住んでいた官舎  
Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch. 二〇〇一年五月号 表紙
- 四 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」日独文化交流を支えた人々第一回 旧制松江高等学校教官 フリッツ・カルシユ  
博士 Förderer des japanisch-deutschen Kulturtausches (1) Lektor an der Matsue Kotogakko Dr.Phil. Fritz  
Karsch (1893-1971) 二〇〇一年九月号七―八頁
- 五 若松秀俊「湖畔の夕映え カルシユ博士と松江」文芸社 (二〇〇二年六月)
- 六 若松秀俊「第二のラフカディオ・ハーン」致知 二〇〇二年九月号 八十七―八十八頁。
- 七 若松秀俊島根日日新聞 フリッツ・カルシユ「神々の里に見た美と安らぎ」(二〇〇五年一月一日)
- 八 Brückebauer Pioniere des japanisch-deutschen Kulturtausches 158-163 Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin
- 九 若松秀俊「忘れ得ぬ偉人」カルシユ博士と松江 マツモト(二〇〇七年二月)
- 十 若松秀俊「四ツ手網の記憶」松江を愛したフリッツ・カルシユ ワンライン (二〇〇七年七月)

## 情報入手源としての参考

- 一 嵩のふもとに(旧制松江高等学校校史)
- 二 翠松 (旧制松江高等学校同窓会報)
- 三 大阪支部会報松友
- 四 東京松高会報
- 五 カルシユ旧生徒および同窓生の手記
- 六 カルシユ講義録(一九三〇―三二年)、宮田正信所蔵
- 七 松江高等学校同窓会員名簿 一九九四年四月

- 八 松江高等学校六期生卒業アルバム 澤田弘夫
- 九 写真 遠藤・江上・白石・溝上・中村・奥野・宮田・増田、田島より提供
- 十 手記 坪内・増田・白石・宮田・岡崎・奥野・遠藤・松本・矢崎・千代・前田より提供
- 十一 資料 竹原・野津・田島・江角などより提供
- 十二 酒井勝郎 田舎の大学から(私家版)一九六九年
- 十三 酒井勝郎 初旅のヨーロッパ三週間 (私家版) 一九七五年
- 十四 酒井勝郎 カルシユ先生(私家版) 一九八〇年
- 十五 学制百年史 文部省編(一九七二年八月)

なお、細部にわたつての資料や確認には、以下の官庁・公的機関などを利用した。文部省 人事課任用班、福祉班、島根県教育庁高校教育課、国立島根大学 総務課人事係 図書館員、松江市役所 国際交流課、出雲大社社務所、東京都世田谷区役所、横浜市役所、日独協会、ドイツ文化会館、ドイツ学術交流会、東京大学独文科、筑波大学図書館、衆議院前議員室、宮内庁、外務省、外交資料館、旧官立松江高等学校生徒同窓会、ドイツ連邦共和国ドレスデン市庁住民局、カッセル市庁住民局、アルベルト・コルベ・ハイム。さらにインターネッ卜情報検索を利用した。

併せて、ふるさとの文化遺産 郷土資料事典 三十二 島根県 人文社 一九九八年、また松江市および境港市観光ガイド、島根県内の読売新聞をはじめ各社の新聞を参照した。

## 著者略歴



若松 秀俊 一九四六年福島県生。一九七二年横浜国立大工学系大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教、福井大工学部教授を経て、一九九二年より東京医科歯科大医学部教授、同大大学院教授、現在に至る。その間、沖縄県立看護大学大学院・文京学院大学非常勤講師。専門は生体機能支援システム工学。一九七三年―七五年ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニュルンベルグ大学医学部バイオサイバネティクス研究所研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、韓国釜山国立大学などの客員教授・研究員兼任。工学博士（東京大学）。著書に「湖畔の夕映え」「忘れ得ぬ偉人」「四ツ手網の記憶」「医用電子と生体情報」「医用工学」「救急医療のための機器システム」「新しい大学院教育を探る」「ナースのための遠隔情報管理システム」「大海の都邑」「王家の祠（日本語および韓国語版）」「バーチャルリアリティにおける力覚表示とその応用」など。